# 石井勲の漢字教室

## 別巻 母と子の実践教室

### I 子どもはみな神童

### III 漢字を学ぼう

——国語の基礎学力向上をめざして

**（実践小学校の研究記録から）**




#### はじめに

——無理せず最大の効果を上げる漢字教育を採用して

島根県斐川町立出東小学校校長　中間幸夫

私が出東小学校の漢字教育を直接知ったのは、昭和五十五年秋の教育研究会で行われた、出東小の周藤祥一先生の発表を聞いてからです。先生は子どもの国語力、特に漢字を読む力をつけるために、日常生活に常に出てくるような言葉は一、二年生でも思いきって漢字で教えること、国語以外の教科でもそれぞれの教科の重要用語は表意文字である漢字で教える方が理解され易いこと、また、国語の教科書に漢字を貼ったり、板書も学年の新出漢字の配当などに囚われず思いきって漢字を書くなどして、子どもたちに漢字を数多く眼にふれさせることが読み書きの力に効果があることなどを、調査結果や具体例をあげながら発表されました。この発表を聴いて、私は平素から子どもたちの読み書きの力不足を感じていたので、共鳴することも多く、強い印象を受けました。

しかし、それ以前に有線放送で出東小の子どもたちが文語文や論語を暗誦するのを聴いたこともあ

り、感心はしながらも、小学生にその内容を理解できないだろうし、わざわざ教科書に漢字を貼るなど行き過ぎではないかなどと考えて、私は当時勤めていた大社小学校で、すぐにそれを実践する気にはなれませんでした。

当時、大社小の一年生の「学級だより」を見たり教室をのぞいたりすると、「学校」「学年」とか、曜日や教科名などが全部かなで書かれており、私自身非常に読みづらく感じていました。そのため、時には板書で、平易な日常語は思いきって漢字にするようにしたこともありました。先生方も「かようび」より「火曜日」の方が、子供にはよくわかって喜んでくれると話していましたので、その後、出東小の実践を少しずつ取り入れるようになりました。

こんな次第で、出東小の漢字教育に半信半疑であった私が、昨春その出東小に勤めることになりました。前任の稲田和夫校長から、第一声で「漢字教育を続けてほしい」と要望され、不肖の私が、この伝統ある実践、研究を引き継ぐことになったわけであります。

出東小では、昭和五十一年春、足立前々校長の時に、「子どもの生涯に役立つ教育研究を」という願いから、まず教科書が理解できるようにと、「読む力を伸ばす研究」に取り組みました。そして、稲田前校長もこれを受け継ぎ、さらに読みの中でも漢字に着目して、大東文化大学の石井勲先生の指導を受けながら、「石井方式」による漢字教育の実践、研究を始めたのです。こうして今日まで七年間、幾多の問題に逢着しながらも漢字教育を鋭意続けてきました。

この結果、子どもの国語力、ことに漢字の読み書きに大きな成果が見られるようになり、たしかにどの教科を見ても落ちこぼれが減ってきてまいりました。私は出東小に着任してからまだ一年にもなりませんが、それだけに印象も鮮明です。一、二年生が「お話朝礼」でむずかしい漢字をすらすら読んだり、漢文や詩歌を暗誦したり、また三年生になったら新聞を無理なく読めるようになっているのには驚かされました。しかもこの読む力は単に国語学習のみでなく、他教科すべての学習の基礎となり原動力となって、大きな効果をあげております。

この出東小の漢字教育の目をみはる成果は新聞、雑誌等のマスコミにも注目され、今年も県外の学校や東京の新聞社からの参観が相つぎ、いずれも子どもたちが漢字に親しんでいる姿を見て感動されていたようです。

出東小の児童は文字への抵抗もなく、読書などにも積極的に取り組んでおり、子どもの手応えもしっかりとあります。このごろの青少年は一般に漢字に対する抵抗が強く、読み書きの能力が劣っており、これが学習不適応や非行を作る大きな要因となっているようですが、その意味からも出東小の漢字教育は今日的課題に応えるものだと感心され、最近では全国的に注目されるまでになりました。

今年も、これまでの漢字教育の伝統を受け継いで、漢字朝礼、漢字貼りなど、この教育を基礎として、より広い言葉の世界を知ってもらうために詩歌の暗誦などを続けるとともに、教師の全員が授業を公開しあい、研究を進めてきました。

この研究紀要は五十七年度の実践と研究の成果を記録したものです。試行錯誤の実践記録なので、まちがいもありますし、また必ずしも指導の成功例だけではありません。しかし私たちはここにのせられた記録を踏み台として、「子どもたちに読む力を」と念じ、漢字教育を始められた先輩の心を心として、さらに実践と研究を積み上げていきたいと考えています。

終わりに今年も盛夏にもかかわらず遠路お越しいただいてご教示を賜りました石井勲先生に深く感謝申しあげ、今後も変らぬご指導をお願いする次第でございます。また出東小から転出された先生方も尊い記録を寄せていただきありがとうございました。そして本校の研究部をはじめ先生方の労を多とし感謝いたします。

（昭和五十八年三月）

# 第I章 漢字教育の研究概要

## I 研究主題（昭和五十七年・第七年次）

国語の基礎学力の向上をはかるにはどのようにしたらよいか

――読む力を伸ばすための具体的方法を研究する――

## 2 主題の設定と研究の経緯

昭和五十一年三月をもって、県指定の情操教育の研究が終了したのを機会に、「子どもに力のつく研究」をやろうということになりました。そして全職員で全校児童の実態について話し合った結果、基礎学力をしっかり身につけさせてやろうということに落着きました。この基礎学力を「読み」「書き」「珠算」と考え、その中でもすべての教科の基礎となる読み書きの能力の向上をめざそうという共通理解ができあがりました。

どれほどささやかであっても、常に目の前の子どもが一歩でも半歩でも向上することに結びついた研究でありたいと願って主題を設定し、以来、全校態勢で研究に取り組んでから六年が経過しました。

第一年次（昭和五十一年）は基礎調査を実施し、職員研修を通して、朗読・漢字指導についての共通理解をはかることに力を入れました。第二年次は二学期から全面的に「石井式漢字教育」を取り入れ、全校いっせいに教科書の「漢字貼り」を始め、三学期には石井勲先生に初めて直接指導を受けました。さらに第三年次は全学年で「漢字貼り」を続けるとともに、低学年における「お話による漢字指導」、中・高学年における「解字指導」を試み、予期していた以上の成果を得ました。そして二学期末には再び石井先生をお迎えして、さらに具体的な指導を受けるまでになりました。第四年次は「漢字貼り」「漢字朝礼」とともに、石井式漢字指導法の徹底を日常的に努め、夏休みに石井先生をお迎えして、三日間にわたって解字の指導を受け、十二月には全学年を対象に「漢字の読みの調査」を実施しました。第五年次は「ことばの指導」というテーマをかかげ、石井式漢字指導の研究深化に努め、とくに具体的な授業の場における「ことばの指導」のために、低・高学年各一学級ずつによる焦点授

業を実施しました。また、全校朝礼時に全校朗誦を取り入れました。夏休みには、石井先生に「石井方式の原理」の指導を受けました。そして、第六年次（昭和五十六年）は石井式漢字指導法の一層の研究深化と漢字の生活化をはかることに努め、前年に引き続いて、抽出学級による焦点授業を実施し、より具体的な「ことばの指導」を模索してきました。そして夏には、またも石井先生に指導を受け、今日では慣例となっております。

さて国語教育には生活全般にまたがる国語教育と、国語科の中で行われる国語教育との両面があると考えられます。ややもすると国語科の中だけで行おうとする傾向があるように思われますが、過去六ヵ年間に積み重ねてきた出東小学校の研究は、その両面から国語の力を伸ばそうとするものでした。

今年は、この六ヵ年の実践の成果をふまえて、石井式漢字指導法の一層の研究深化と漢字の生活化をはかるとともに、幅広い国語教育（ことばを大切にした教育）の中で培われた力をベースにして、国語の基礎学力、その中でも最も重要な「読む力」の向上をめざして具体的な指導法の研究を全校態勢ですすめてきました。

## 3 主題達成のための基本的姿勢

常に初心を忘れず、机上の空論であったり、書物からの受け売り、借り物であったり、あるいは「研究のための研究」にならないよう自戒したいものです。そして、いつも「子どもに直接はねかえる研究」をめざし、たえず全職員の共通理解をはかり、各人の創意工夫による実践を大切にして行きたいものです。

また、つねに子どもを見つめながら確信をもって実践に取り組み、いつでも、どこでも、誰にでもできる、長続きする研究をめざしていきたいと思います。

## 4 実践のあらまし

### (1) 石井式漢字指導の研究深化と日常化

**(ア) 学年に応じた「漢字貼り」の実践**

・できるだけ多くの漢字に目を触れさせるために、主として読む教材で漢字貼りを実施しました。
・一年生は昨年の反省をもとに、漢字の数を減らして、入学早々から実施しました。

**（イ） 学年朝礼における漢字指導の実践**（後述「漢字朝礼の手引き」参照）

・低学年では「お話による漢字指導」（お話朝礼）、中・高学年では「解字による漢字指導」（解字朝礼）を中心にして、学年ごとに毎週一回ずつ実施しました。朝礼の内容については、子どもたちの反応を見ながら、弾力的に実施することにしました。
・本年度は、昨年度からの課題であった「漢字朝礼の手引き」を作成しました。また、初めて「お話朝礼」を経験する一年生と同じく、初めて「解字朝礼」を体験する三年生の第一回目の朝礼を公開して新任教員研修会をもつなど、誰でも気軽に取り組めるよう配慮しました。

**（ウ） 漢字を積極的に使用**

・できるだけ多くの漢字に目を触れさせるために、全教科の中で積極的に漢字を使用するようにしました。（プリント・板書など）

**（エ） 児童の目に漢字を触れさせるための環境整備**

・目に触れる機会の多い漢字は教わらなくても自然にわかっていきます。また教わることによって知る漢字も、子どもたちに定着するのに一定期間が必要であります。結局、漢字を覚えるのに最も大切なことは、反復と興味であって、そのための環境づくりをしました。（掲示黒板・掲示物など）

### (2) 読み取る力を伸ばすための授業研究

読む力を伸ばすためにはどのようにしたらよいかを、学年の発達段階に合わせて、各学年ごとに主題に迫る具体的な方法を研究し、より効率的な指導法をさぐることにしました。（公開授業を催す）

### (3) 美しい言葉の響きを大切にさせるために

音読、朗読に力を入れるとともに、古今東西の詩の暗誦を奨励しました。国語部を中心にして毎月の暗誦詩を決め、「こころのうた」として全校朝礼時に全校朗誦を続けました。また児童会主催の百人一首大会が開かれ、全校参加で大変盛不上りました。

(4) 読書指導の充実のために

・読書指導の時間を確保します。
・児童図書を充実（今年は約八〇〇冊購入）し、読書環境の整備をすすめます。
・図書館利用の指導をします。

(5) 全職員の共通理解をはかるための職員研修

・毎月一回、研究職員会を実施しました。
・「朗読・漢字指導の手引き」「漢字朝礼の手引き」を利用して、転入してきた職員の研修の時間をもちました。
・漢字指導者講習会に全職員が参加し、石井式漢字指導法と解字等について、石井勲先生から直接指導を受け、また各種研究会にも積極的に参加しました。

## 5 今年度の反省

・漢字貼りを読みの中に位置づけているが、漢字貼りの時期、貼る量など子どもの実態に合わせて考慮する必要があります。また漢字貼りに対する子どもたちの意識も様々なので、時には漢字貼りの意味について話してやることも必要です。
・お話朝礼は子どもたちも非常に喜び、この朝礼を通してたくさんの漢字を覚えました。歴史ものなども、題材に加えて変化をもたせると発展的な読書につながることもありました。
・三年生以上の解字朝礼では、教師側からの一方通行になりがちですが、子どもたちが活躍する場を作ると意欲的に取り組むようになりました。また提出漢字や解字指導で悩むこともありますが、常によりよい方法を模索しながら根気よく続けることが大切であることを痛感しました。
・全員が公開授業をしたことによって、皆が同じ気持ちでこの実践研究に取り組むことができてよかったようです。そうした中で子どもたちの読み取りの姿勢も変わって、拾い読みもなくなり、文章に即して読み取る力がついてきました。また教師自身の力不足を感じて、さらに研修を重ね

る必要を痛感しました。

今年度は、数年来積み上げてきた基盤の上に、新たに「読む力」に焦点をあてて実践を重ねてきました。子どもたちは意欲をもって取り組むようになり、読む力、書く力も確実に伸びて、大きな成果が上がってきています。このような今年の実績と反省をふまえて、来年は石井式漢字指導の一層の推進をはかるとともに、さらに「確実に読み取る力」を伸ばすための方法をもとめて、全職員が力を合わせて研究を進めていくつもりです。

## 漢字朝礼の手引き

「お話朝礼」について（一～二年生）

### 1 ねらい

直観力に優れている低学年の特質を生かし、お話を楽しく聞かせながら、お話に出てくる漢字を板書することによって、漢字に目を触れさせる機会を多くし、漢字に興味をもたせることを意図しています。

### 2 方法

教師がお話をしながら、お話に出てくる言葉を漢字で板書します。そして同じ漢字が出てくるたびに、それを指差してお話が終わったところで、板書した漢字を子どもに読ませるという方法で進めま

す。板書する漢字は、そのお話の中の大切な言葉や繰返し出てくる言葉を選び、十字前後が適当のようです。また「お話朝礼」の時間は十五分くらいを一応の目安としています。

「解字朝礼」について（三～六年生）

**1 ねらい**

基本となる部首を含んだ漢字について解字をすることにより、漢字のもつ意味や使い方をより深く理解させ、言葉というものに興味や関心をもたせることをねらいとしています。これは漢字習得にきわめて有効であると考え、中・高学年で実施しています。低学年に較べ、この学年になると、直観力が落ちるかわりに論理的な思考力が発達してくることから、「お話朝礼」にかわるものとして「解字朝礼」を行っています。

**2 留意点**

解字指導で学習した漢字は、もちろん子どもたち全員がそのすべてを理解してくれなくても構いません。指導したことの一つでも二つでも心に留めてくれれば幸いであるというくらいに考え、そして漢字学習はおもしろく、楽しいものだと感じてくれるような朝礼を心掛けています。

以下に例をあげる学年別の部首、漢字はあくまでも目安であり、これにしばられる必要はありません。大切なことは、反復することを常に心掛け、子どもの反応や理解などを考慮して、指導する者の創意工夫による解字指導を行うことです。

**3 学年別「解字朝礼」についての考え方の一例**

三年生――解字指導の入門期であるので、最も基本となる部首（手・足・人シリーズ）を理解させることが中心となる。

四年生――三年生で指導した部首の定着とそれ以外の部首を指導し、この学年で一通りの部首の指

導を終えたい。

五年生――三・四年生で学んだ部首を組合わせてできた漢字の解字を行い、深い意味をつかませる。

六年生――やや複雑な漢字の解字や同音異義、同訓異義浩の解字や解説を行う。

**4 取上げる部首・漢字の例**

三年生――手シリーズ〈扌・又・寸・攵・⺗・ヨ・彐・支・寸・六〉

〈例〉右（扌と口の指導）――→左（工の指導）――→有（肉月の指導）――→前（舟月の指導）

→期（月偏の指導）

友（扌と又の指導）――→取（耳と又の指導）――→反（厂の指導）――→返（辶の指導）

→坂（土偏の指導）

→板（木偏の指導）

→飲（食偏の指導）

→投（扌偏・攵の指導）

――足シリーズ〈止・癶・⺾・五・夂・辶・⻍・彳・行〉

〈例〉止（足の裏の形）――→正――→歩――→足――→走――→降（阝の指導）

発←脚←郡（阝とヨの指導）

登←違（辶の指導）

――人シリーズ〈匕・夕・亻・人・儿・頁・厶・自・欠・口・心・忄・月〉

〈例〉比（匕の指導）――→北――→花（艹・亻の指導）――→見（人脚の指導）

→死（歹偏の指導）　列・別（刂の指導）

背（肉月の指導・仮借字の指導）――→目・鼻（顔の部首指導）→公・面

→丁・釘（金偏の指導）

→七・切（刀の指導）

――「手」「足」「人」シリーズの関連字

・手――右・左・有・友・取・双・投・反・受・授・手・菜・採・筆・争・妻・急・掃・

教・牧・敗・共・具・供・開・寸・尋……

・足――止・正・足・走・発・登・降・違・衛……
・人――比・北・化・花・死・見・兄・児・面・首・私・息・自・鼻・公・吾・飯……

**四年生**

・冫――冷・氷（氵水）・冬・寒・洲（州）・波・深……
・火灬――黒・赤・燃・照・燈・災……
・雨――雨・雪・雲・電・雷……
・門――戸・開・閉・間・問・聞……
・刀――切・初・分・刃・前・利・判・列・別……
・阝（邑）阝（阜）――郡・郷・都・部・防・降・険・陸・階・陽……
・衣・示
・广・尸・厂
・隹・宀・穴・月・月（肉）・月・口・匚・戈・弋……

**五年生**

禁（木示）・判（半刂）政・（正ノ又）・版（木厂又）・授（扌爫冖又）・精（米生月）・比（ヒ匕）・未・末・果・群・郡・非・悲・不・無・経・径・軽・妻・婦・掃・衆・集・品・検・永・脈・派・券・輪・愉・衛・観・勧・雑・往・注・駐・柱・住・祖・組・粗・護・獲・穫・保・育・流・子・似・以・解・紀・記・表・裏・陰・陽

**六年生**

聴・聞・看・観・見・視・診・覧・合・会・遭・鳴・啼・泣・紙・誌・径・途・道・路・汐・潮・洲・州・島・嶋・河原・川原・影・陰・暑・熱・絶対・絶体・住・棲・主・首・起・建・立・字典・辞典・事典・最後・最期・食料・食糧・珠・玉・球・弾・作・造・創・解・融・溶・跳・飛・治・直・殴・撲・睡・眠・延・伸・早・速・分・別・昇・上・登・帰・返・環・狩・猟

# 第2章 一年生の実践

昨五十六年に「入学当初から漢字で学習するのがよい」という指導をうけ、これまで二学期から始めていた「漢字貼り」を、今年は四月から行いました。

新一年生の実態を調べてみると、〝家庭教育学級〟で推進されている親子読書の影響もあってか、ひらがなはほとんど読むことができ、また書くこともできましたが、字形や書き順は自己流なので、このままほおっておくと間違ったまま、頭の中で固定されてしまうおそれがあります。また昨年は一年生の後半になっても、まだひらがなに抵抗をもつ児童が、少数ですがいたという反省の上に立って、今年ははじめの単元では、とりあえず漢字の数を減らして、ひらがなをしっかりおさえることにしました。

## 1 漢字への関心

幼稚園ですでに〝漢字絵本〟に親しんでいる児童たちなので、入学式の当日から漢字で、「出東小学校一年一組」と板書しても少しの抵抗もなく、またすでに自分の名前を漢字で書ける児章が多数いました。はじめは何と書いてあるか判読できないような字が、一学期をすぎると次第に形が整って、ほとんどの児童が自信をもって漢字で名前を書けるようになりました。

教師が板書するどんな漢字に対しても「わからない」とは言いません。「〇〇かなあ」と、まず読んでみる習慣がついていて、他の学校の児童にはみられない漢字に対する関心の強さが出東小の一年生にはうかがえました。

## 2 漢字貼り

入学当初の国語の内容は、ほとんど絵だけでありますが、そこにも早速漢字を貼っていきました。新一年生ははたしてやってくれるだろうかと不安でした。ハサミが思うように使えず苦労する子どももいましたが、思ったよりスムーズに出来ました。しだいに漢字が増えるにしたがって能力差が出てきて、時には、早い子どもが遅い子どもを手伝ってやることもあり、はじめのうちは手伝ってもらって喜んでいた子どもも「今度は最後まで自分でするぞ」と意気込んでいました。また、音読も、ひら

がなの時のような〝拾い読み〟がなくなり、読みやすくなったという子どもがほとんどでした。

第一単元では「海」と「雲」の漢字貼りをしました。どちらの漢字も二度ずつ出てくるので、子どもたちは大変よろこびました。第二単元では「熊」「子栗鼠」「仲良く」などの漢字貼りをしました。漢字貼りの原稿は、児童がハサミをまだうまく使えないことを考慮して、単語ではなく言葉のまとまりを一片にして貼らせることにしました。また、まだ数字やひらがなを正式に学習していないので、言葉のまとまりの上に目印になる絵を書き入れ、子どもたちが見つけやすいようにしてやりました。

第五単元の「お月さま」からは、それまでのように言葉のまとまりではなく、単語の紙片を貼らせることにしました。漢字貼り込み用のプリントは、次のようになっています。このプリントの□の中の漢字が、教科書ではかなになっています。その教科書のかなの上に、プリントから切り抜いた漢字を貼っていくわけです。子どもたちは、□の漢字を読んで、教科書の中に該当するその部分に目を走らせます。見つけるとハサミで切り抜き、ノリをつけて、教科書のかなの上に貼ります。

お月さま

熊さんは、おつかいの帰り道、

森の中を歩いて いました。

日は すっかり暮れて、空には

大きなお月さまが出ています。

「大きな お月さまだ。」

熊さんは、空を見上げて言いました。

森を ぬけて、丘の上に出ました。

「あれ、お月さまが……

熊さんが歩くと、お月さまも……

「さっきは森の上にいたのに、僕が

丘に出ると丘の上まで ついて きた。」

## 3 ひらがなの指導

ひらがなは新しい字が出た時点でしっかりおさえ、子どもの間違いを訂正し正しい字が書けるまでノートに練習させました。また、マス目に縦横の中央線を書き入れた五十音の手本を用意して、正しい字形を書けるように敷き写しもさせながら、第五単元に入るまでには五十音の学習を終えました。

## 4 お話朝礼

五月からはお話朝礼を始めましたが、はじめのうちはなかなかお話の中へとけこめないようでした。お話の中の言葉から連想したテレビのコマーシャルの話をすることもありましたが、六月頃からは真剣さが出てきて、お話朝礼を楽しみにするようになりました。

お話をしながら内容の一部を漢字で板書していきました。書いた時点では読めない漢字でも、話のあとで読ませるとみんな読んでしまいます。子どもたちの頭はまったく吸取紙のようでした。

〔一学期〕**五月十八日** 「熊の風船屋さん」

〈あらすじ〉栗鼠のお母さんと子どもが森を散歩していると、熊の風船屋さんがいろんな色の風船をいっぱい持ってやってきました。子栗鼠はお母さんにねだります。一つ買ってもらうと、また一つ、また一つ……とたくさん手に持ちました。すると子栗鼠は空へふわふわと浮いて上り始めました。さあ大変、動物たちがやってきて助けようとしますが、なかなかつかまえることができませんでしたが、やっとのことで、鷲が助けてくれました。

〈提出語句〉熊 風船屋 黄色 緑 赤 青 子栗鼠 栗鼠のお母さん 象 猿 木 麒麟 鷲

〈指導メモ〉「熊」「子栗鼠」の二つは、すでに貼り漢字として目に触れているため、すぐに読めました。子どもたちは風船が大好きなようで、熊の風船星さんが持っている風船の色をめぐって活発な反応を示して聞いていました。色に関しては運動会も近いので、四色を出しましたが、子どもの反応によっては白や茶色、その他の色も提出します。

**五月二十五日** 「橋の上の狼」

〈提出語句〉谷川 一本橋 長い 一人 兎 狼 狐 狸 猿 熊 朝 日 夕日

〈指導メモ〉動物の漢字は喜んで読みました。「朝日」は一回しか出てこなかったので、後でもう一度読ませた時は読めませんでした。

**六月一日**「瓜姫」

〈提出語句〉瓜姫 昔々 お爺さん お婆さん 箱 お嫁さん 瓜 赤ちゃん 美しい娘 荷物 爪 手 足 体

〈指導メモ〉「お爺さん」「お婆さん」と聞くと「ああ柴刈りだ」という発言がでて、「箱」の漢字に「もも」「いや、ちがうみたい」と反応がありました。「はこ」と読んでみせると「そんな話あったかなあ」と不思議そうに聞いていました。「爪」「手」「足」「体」はほとんどの子が読めました。

**六月八日**「はなたれ小僧さま」

〈提出語句〉昔々 貧乏な男 町 川 龍宮の乙姫 トホウ 花 小僧

〈指導メモ〉「はなたれ小僧」と聞いて、子どもたちは自分のことのように感じたらしく、自分の鼻の方へ手をやっていました。「貧乏な男」と聞くと、「石川ごえもんかな、猿飛佐助かな」とつぶやき、「小僧は着物は汚いの？ 貧乏な男の服は？」と質問がありました。また、貧乏な男がはなたれ小僧に「帰る家はないのか」と言って追い出したら、もとの貧乏な家に戻ってしまったと話すと、「あんなこと言うからだ」と話の中に入りこんで来ました。この頃から話を真剣に問くようになり、お話の後で出てきた漢字を読む時も大きな声で一所懸命に読むようになりました。

**六月十五日**「松の木の下の老人」

〈提出語句〉昔 美しい娘 お坊さん 命 北 高い山三つ 松の木 三本 白髪の老人三人 盃 酒

〈指導メモ〉このお話はおもしろそうに聞いていました。「昔」「娘」「木」「酒」はすぐにわかりましたが、「お坊さん」を「おじょうさん」と読んでいました。

**六月二十二日**「馬になった男の話」

〈提出語句〉昔 三人の男 伊勢神宮 安宿 宿屋の主人 草もち 馬 ばくろう(馬の商人) 石 砂利 沼 人間

〈指導メモ〉宿屋の主人にだまされて馬にされ、その敵討ちをするというすこし深刻な話なので真剣に聞いていました。「神宮」を「じんじゃ」と読み、「安」を見て「女がついてる」と言

っていました。

**六月三十日**「うぐいす長者」

〈提出語句〉昔々 ある村 貧乏なお百姓さん 親切 娘 部屋（一つ目 夏、二つ目 秋、三つ目 冬、四つ目 春） 不思議

〈指導メモ〉大金持ちの娘のお婿さんになったお百姓さんが「三つ目まではあけてもいいが、四つ目はあけてはいけませんよ」といわれ部屋の鍵をまかせられた、というお話です。お婿さんが鍵をあけていく情景を話すたびに「おどろきーー、わあ」「冬、やあ、へえ」と反応し、あけてはいけない約束の四つ目をあけた時は「あーあ、あけちゃった」と話の中に入りこんでいました。漢字は「親切」が読めませんでした。

**七月七日**「猿のおむこさん」

〈提出語句〉猿 昔 お百姓さん 草 山 白 藤の花 一ばん目 二ばん目 三ばん目の娘

〈指導メモ〉「猿」と書いたらすかさず「あ、動物だ」と声があがったので驚きました。けもの偏に気づいたのでしょう。「象かな、馬かな、猿かな」と勘であてていました。

〔二学期〕**九月二十一日**「みしのたくかにとをたべた王子さま」

〈提出語句〉昔 種 朝顔 西瓜 南瓜 王子さま 馬車 王さま お妃さま 大臣

〈指導メモ〉初めてカードを利用しました。同じ漢字が何度も出てくる時、お話の筋に合わせてこのカードを移動させます。「みしのたくかにと」という言葉がおもしろいらしく喜んで聞いていました。「西瓜」と「南瓜」の読みをとりちがえていましたが、「朝顔」は一学期に理科で学習したのですぐ読めました。

**九月二十八日**「大きな蟹」

〈提出語句〉 隠岐の島 モトヤ村 木こり 斧 ヤスナガ川 奥の山の中 大きな滝 絵のような美しい姫 神

〈指導メモ〉「金の斧」と内容が似ているため、初めは「知ってるよ、知ってる」と得意そうにしていましたが、滝の中から絵のような美しい姫が出てきたあたりから、どうなるのかなと興味が出てきたようです。知っているような話でも子どもは喜んで聞くようです。

**十月十二日**「さようのなわ」

〈提出語句〉斐川町 昔々 婿さん 挨拶 下男 犬

〈指導メモ〉「斐川町」は地元の名であるため、さすがによく読めました。「婿さん」を「あんさん」「おばさん」「おじいさん」「おばあさん」といろいろに読むのはいいのですが、おもしろがって適当に当てずっぽうで言っている様子でした。「はい、さようでございます」のくり返しに喜んでいましたが、最後に「さようのなわ」が切れたのが、よく理解できないようでした。

**十月十九日**「森の動物たち」

〈提出語句〉冬 山の動物たち お母さん 毛糸 兎―赤いセーター 狸―青いチョッキ 能さん―白と黒のズボン 栗鼠―黄色い帽子 豚―緑のスカート 馬―茶色い手袋 狐町の動物園 ナムカンポンコンチキコーン 毛皮屋 女の子

〈指導メモ〉動物を意味する漢字はすぐ読めましたが、「毛糸」や「狸」が読めないのは意外でした。おまじないのような言葉が出てくると声を合わせて一緒に言ったり、話にのっていたようです。題名は後で皆で考えてつけました。

**十一月九日**「猫の恩返し」

〈提出語句〉お百姓さん 正直者 働き者 貧乏 お嫁さん ある雨の晩 長者 畑 麦粉 人間

〈指導メモ〉「働き者」を「動物のどう」とか「うごき者」とか読んでいました。「長者」と書くと「なが」、「畑」は「火と田があるからひただ」と見たことのない字でも、何とか読んでみよう、考えてみようと努力する子どもたちの姿勢が見られるようになりました。

**十一月十六日**「としよりの犬の話」

〈提出語句〉昔々 犬 皮 山の狼 赤ん坊 森の中 命の恩人 魚 肉 猫 鬼

〈指導メモ〉こわそうなお話なので子どもたちはじっと聞いていました。「恩人」はちょうど国語で「蟻の恩返し」をやっていたところなので、すぐ読めましたが、「命」は難しかったようです。「肉」がでると「あ、肉まん」と言っていました。

**十二月七日**「お母さんの誕生日」

〈提出語句〉太郎君 お母さん 妹 十一月二十六日 家族 お父さん 肩たたき券 手伝い券 がまん券 日

曜日

〈指導メモ〉「みんな、お母さんの誕生日知ってる?」と聞いたら、半数ほどの児童が手を挙げました。「太郎」の「太」を「いぬ」と読んだり、「うちのおじいさんの字だ」と言う子もいました。また「妹」を「おねえさん」と読んだ子もいました。「家族」は読めません。子どもたちにお話に出てきた三つの券を自分でも作ってごらんと言っておきました。

〔三学期〕**一月十八日**「お婆さんに化けた猫」

〈提出語句〉ある冬 男 峠 木 谷間 猫 侍 刀 剣道の名人 人食い猫

〈指導メモ〉「峠」は読めません。「侍」を「てらかな?」と言ったり、「剣道の名人」を「なんとかみちの人」「名前の人」などといろいろ出ました。

**一月二十五日**「宝船」

〈提出語句〉「お母さん、お誕生日に何がほしい」 すてきな夢 宝船 折り紙 お正月 枕の下 初夢 枕 カバーの中 お父さん―ケーキ お姉さん―花模様のスリッパ 銀色 毎晩

〈指導メモ〉身近にありそうな話なので興味を示したようです。「帰ってやってみるわ」と言っていましたが、実際にもやってみた子がいるようです。このように、お話が子どもの現実の生活の中に広がっていくことは教師にとって嬉しいことです。

**二月一日**「ひょうたんぽっくりっこ」

〈提出語句〉昔々 薬売り 元気な若者 村 橋の上 河童 薬箱 金紙 お礼 大金持

〈指導メモ〉お話の中に入り込めずに現実的に考える児童がいてムードをこわすことが時々あります。「河童がお腹が痛くて苦しんでいると薬売りが薬をあげました」という箇所で、「そんな薬が効くかな、河童に。うそだわ」という発言があって、教室がシーンとなってしまいました。これまでは漢字を読むのはいつも決まった二、三人でしたが、今回はその数が一気に増え、うれしく思いました。

**二月八日**「雪猫」

〈提出語句〉寒い冬の日 女の子 窓 白い物 細いしっぽ 三角形の耳 ビー玉のような目 金色 銀色 青 水色 緑 猫

〈指導メモ〉「白い物」「細いしっぽ」「三角形の耳」と順々に出すのにつれて「わあ、何だろう」と話

に乗ってきましたが、猫とわかると「なーんだ」とつまらなそうな様子。お話が終わって「今日の雪もどこかから雪猫さんが運んできたのかもしれませんね」と言うと、「なんでそんなことがあるの」と受け入れません。「金」「銀」はよく出すのですが、まだ取りちがえて読む子が多いようです。

**二月二十二日**「小人につかまった女の子」

〈提出語句〉ずっと昔 森の中 三人 一番目 二番目 土の中 苺つみ 蜂蜜 鳥の羽 お嫁さん

〈指導メモ〉子どもたちは絵本に出てくるようなほんとに小さい小人を想像しながら聞いているので、小人が女の子を捕える所で、「小人は小さいのに、よく女の子を捕えられるね」と不思議がっていました。「女の子はわざと楽しそう……」の所では、「しらじらしいなあ」という声が出ました。漢字はだいぶ読めるようになりましたが、他の児童が読んでる最中に聞いていない子がまだ多いようです。

――一年間をふりかえって――

新一年生は皆、漢字に興味をもち、抵抗なく受け入れてくれました。「心のうた」は子どもたちに好評でした。これは、詩の暗誦が強制的でなく、子ども一人一人が自発的に家庭で覚えてきたら、それを教室で聞いてあげるという方法をとっているからだと思われます。毎月取りあげた詩は、朝の会で一緒に唱えるので、むずかしい論語のようなものも、一ヵ月ほどで暗誦できました。

子どもたちが、やがて中学生、高校生となって、何かの折に再び「心のうた」の詩に出会った時、「ああ、こんな意味だったのか」と改めてその詩を理解でき、一層の共感を持つことでしょう。

出東小の子どもたちは一年生の時からたくきんの漢字に触れるため、漢字に興味を抱き、どんな漢字でも、自分の力で読もうとします。したがって、たくさんの漢字が正しく読めるようになり、さらに読書好きとなって、いろいろな知識も身についてきます。

子どもにとって漢字はむずかしいものと思い込んでいましたが、この一年間、このような子どもたちの反応を目のあたりにして、漢字学習のすばらしさを認識した次第です。今後も一肩努力して、石井式漢字教育の研究をすすめていくつもりです。

（担当 佐藤恵子・内部佐依）

# 第3章 二年生の実践

## ー お話朝礼

去年までは日本の昔話が主でしたが、今年からは外国のお話も取り入れ、二回の続きものも始めました。また教室の前に掲示板をおいて、そこに前回のお話朝礼で提出した漢字をカードにして貼っておくことにしました。子どもたちはお話朝礼がとても好きなようです。お話朝礼がある朝はきちんと席につき待っており、休み時間には掲示板の前に立ち声をそろえ漢字カードを読んでいました。

〔一学期〕**五月二十一日**「魔法の魚」(『ラング世界童話集』から)

〈提出語句〉魔法の魚 海辺の村 わがままな娘 紅色の魚 頭 顔 息 魚 城 女王様 人魚 魔女 冠

〈指導メモ〉「魔」の字を板書すると、子どもは「あくまのま、まほうのま」と言います。「よく知ってるね」とほめてやると、「まじょのま、だもの」と得意そうでした。「娘」と書くと「むすめ!」と、答え、さらに「娘って何?」と聞いてみると「おんな」「女の字があるもの」と答えました。お話が終わった後に、板書した字を全員で声をそろえて読んでみました。

「一人だけで読める人?」と聞いてみると、男子の三人、女子一人の手が挙がりました。

**五月二十八日**「魔法の魚」(つづき)

〈提出語句〉魔法の魚 女王様 わがままな娘 魔女 冠 森 鹿 猟師 王子様 高い壁 蟻 高い塔 猿 重い 病気 蚊 魚

〈指導メモ〉「魔法の魚」から「冠」まで前回提出した漢字のカードを貼りながら、前回までのあらすじを話して思い出させました。「猟」の字は誰も知らず、「ひつじ!」と言ってみる子どもがいました。「蚊」を板書すると「だに!」と声があがったので、「虫に文がついているでしょう。ブーン」とヒントを与えると、「あ、そうか、かだ」と気づきました。

**六月三日**「とんで逃げた鬼」(『島根の昔話』から)

〈提出語句〉斐川町 昔々 金持ち 田植え 赤ら顔 大男 稗 一俵 機織り

**六月十日**「金の服と布の服」（『ラング世界童話集』から）

〈提出語句〉猫 召使い お母さん 姉娘 妹娘 金の服 布の服 鳩 鳩の方を向く 金の星 馬 反対の方を向く 金貨

〈指導メモ〉今日は長崎県の長里小学校から先生方の視察がありました。子どもたちは見知らぬ人がいて緊張したのか、初めは落着かないようすでしたが、やがて慣れていつものようになりました。「姉娘、妹娘」が出た時、一人の男子から「女のきょうだいには女がつくみたいに、男のきょうだいにはやっぱり男がつくの？」という質問が出ました。これは「漢字」の特質に気づいている質問といえます。

**六月十一日**「金の服と布の服」（つづき）

〈提出語句〉お母さん 猫 召使い 姉娘 妹娘 お后様 王子様 井戸 金の星 馬 金貨 尻尾 金の服

〈指導メモ〉毎週金曜日に決めているお話朝礼を、他校の先生方の視察のため昨日に変更したのですが、「金曜日はお話朝礼の日でしょう！ だからお話をして」と子どもたちから強くせがまれ、前日に続いてすることになりました。

**六月十八日**「アカショービン」（『加古里子のお話十二ヵ月』から）

〈提出語句〉梅雨 南の島 昔 庄屋 親子二人 納屋 蔵

〈指導メモ〉かわいそうなお話なので、静かなふん囲気で聞いていました。

**六月二十五日**「小さな国と大きな国」（『ラング世界童話集』から）

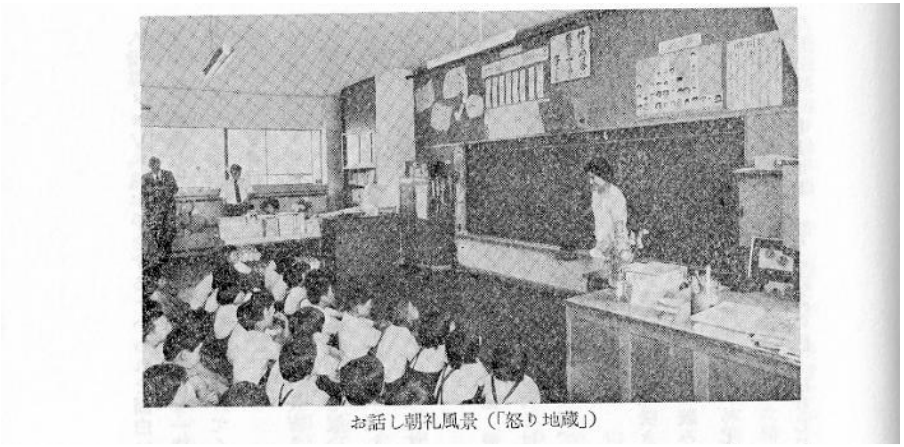
〈提出語句〉王様 隣りの大きな国 大臣 椅子の回り 黒い輪 学者 柳 機織り機械 積み木 鳥籠 男の人 麦 鳩

〈指導メモ〉お話の題名は、最初に板書する場合と、お話が終わってから教える場合とがあります。後者の場合には子どもたち自身に題名を考えさせる場合が多くあります。今日のお話の題名も子どもたちが考えたものです。

**七月二日**「七夕の星」（『加古里子のお話十二ヵ月』から）

〈提出語句〉天の川 アルタイル ベガ 中国 牛飼い男 牽牛星 機織り女 織女星 星祭り 光の速さ

〈指導メモ〉お話が終わったあと、子どもが教室の前に置いてある〝仲良し文庫〟の中からこのお話を見つけだし、「あった、あった」とうれしそうにしていました。そんなことがあるとい


お話し朝礼風景（「怒り地蔵」）

っそう〝仲良し文庫〟を利用する子どもが増えるようです。

**七月九日**「怒り地蔵」

〈提出語句〉戦争中 広島の町 小さな地蔵様 優しい顔 小さな女の子 悲しそうな顔 涙 怒った顔 松山市のお寺 怒り地蔵

〈指導メモ〉出東小では親子読書が熱心に行われており、去年は『かわいそうな象』や『広島のピカ』の反響が大変大きく、また今年の映画会では『人間をかえせ』が上映されました。そんな経過をたどっているので、子どもたちはこのお話をとても真剣に聞いてくれ、いつもは漢字が板書されるとすぐ大きな声で読むのに今日はじっと目を凝らして聞き入っていました。

〔二学期〕**九月十日**「魔法使いのお婆さん」（『加古里子のお話十二ヵ月』から）

〈提出語句〉深い森の中 約束 黒猫 みみずく 豚 犬 山羊

〈指導メモ〉「蝿が手をする」いわれを面白い話に仕立てたもので、子どもは喜んで聞いていました。ちょうど参観日でしたので、初めて親にも一緒に聞いてもらうことができ、「参観してお話朝礼の様子がわかってよかった」と後で便りを届けてくれた親もありました。

**九月十七日**「味噌買い橋」

〈提出語句〉乗鞍岳三〇二六メートル 長吉さん 炭 夢 高山の町 豆腐屋 松の木 長者

〈指導メモ〉夢でみたことを信じて「味噌買い橋」で待っていたらお金持ちになったというお話です。この話を知っている子は大勢いましたが、楽しんで聞いていました。炭がどんなものか知らない子もいましたが、話を聞いて「たどん」を持ち出す子もいたり、昔の暮しに興味を持ったようです。

**九月二十四日**「天女の羽衣」

〈提出語句〉隠岐 飯田 昔 若者 お嫁 着物 お宮 若い女の人

〈指導メモ〉いつもそうですが、子どもたちは提出漢字を全部すらすらと読みました。学年内で学力が一番劣ると思われる子にあててみましたが、その子も一人で上手に読みました。

**十月一日**（読み聞かせ）

〈提出語句〉斉藤隆介 もちもちの木 花咲き山 名作

〈指導メモ〉二年生になって初めて本の〝読み聞かせ〟をしました。教師が直接話しかけるお話も喜びますが、今回のような本の読み聞かせにもじっと耳をすまして聞き入るので、これからも時々取り入れようと思いました。

**十月八日**「なみなみの屁っぴりじじい」

〈提出語句〉岩手県 昔 爺さま 長者どん 大砲屁 太鼓屁 梯子 屁 籠

〈指導メモ〉教師が岩手県の研究会へ行った時、おみやげとして聞いてきた岩手のお話です。いろいろな屁をする爺さまの話で、子どもたちは大笑いで聞いていました。漢字は、「梯」を「おとうと」、「籠」を「りゅう」と読んだ子がいました。

**十月十五日**「不知火」

〈提出語句〉熊本 八月一日 昔 火の国 山野 緑 たける 大男 嫁ご 海辺 約束

〈指導メモ〉「不知火」と板書したら「ふしか」と読んだので「しらぬい」と読むことを教え、熊本県では今でも不知火が見られるということなので、そのことを地理的なことも含めて話すと、興味深く聞いていました。

**十月二十九日**「三太郎柿」

〈提出語句〉昔々 三太郎 柿 嫁さん 柿売り 酒 切り株 茸 穴 池 鯉 鮒 釣り

〈指導メモ〉話の筋にリズムがあってわかりやすく、とても喜んで聞いていました。柿売りの売り声の「三太郎柿、三太郎柿はいらんかあ!」に続いて、茸売りになると子どもたちは先を読みとって「三太郎茸はいらんかあ!」と言ったり、三太郎の頭に穴があくと「今度は池だ」と予想をして、とても面白がって聞いていました。

**十一月五日**「あとつけぼっこ」

〈提出語句〉お化け 峠 山 森 林 賢い小僧 山寺 一軒 年老いた和尚さん 日が暮れた 茶店 三日月

〈指導メモ〉一年生の時に聞かせたお話でしたが、喜んで聞いていました。何度くり返してやっても

昔話を喜ぶのと同じことだと思います。休み時間にお話に出てきた「あとつけぼっこあそび」をする子もいました。

**十二月三日**「米子と桂子」

〈提出語句〉お母さん 米子 桂子 栗 山姥 鬼 しらみ着物 下駄 祭り 水くみ千回 米つき千回 雀 鼠 長者

〈指導メモ〉「米子」を「よなご」と読んだので、これは人の名前で「こめこ」と読むと教えたら大笑いになりました。米子に続いて「桂子」とまた変わった名前が出てくるので、娘のお母さんの名前もきっと変わったものだろうと「コンバイン稲子」と予想をたてる子もいました。

〔三学期〕**一月二十八日**「白鳥の娘」（東京書籍の国語の教科書から）

〈提出語句〉白鳥の娘 沖縄 久米島 桜 五色の波 昔 岩山 蛤 五箇 白鷺 種もみ

〈指導メモ〉「白鳥」を「はくちょう」、「五色」を「ごしょく」と読んだので、ここでは「しらとり」「ごしき」と読むのだと教えました。静かな話で、子どもも静かに聞いていました。「桜」については、次回で「柊」を出す予定なので、木偏を強調しておきました。

**一月三十一日**「鬼ども山からもう出るな」

〈提出語句〉冬 大寒 節分 立春 昔々 山奥の一軒家 爺様 婆 様 女の子 鬼 柊の枝 豆 いろりの灰 福の神

〈指導メモ〉長崎県の早岐小学校から先生方が参観に来るので日を変えて行ったものです。いつものようにどの字も大体読めましたが、「柊」だけは読めません。用意してきた柊に似た木の枝を見せたら、翌日自宅から本物の柊の枝を持ってきた子どもがいたり、そのようなことからもお話への関心の高さがうかがえます。

**二月十八日**「雪の子馬」

〈提出語句〉北欧 昔 ノロマ 男の人 峠

**二月二十五日**「菅原道真」

〈提出語句〉東風吹かば 匂ひおこせよ梅の花 主なしとて 春な忘れそ 千年前 天皇 藤原時平 大宰府 飛梅 北野 天満宮 天神 学問

〈指導メモ〉出東小の愛唱歌集にものせている道真の歌をもとにして、それにまつわる故事を話しました。このようなお話は子どもたちには初めてなので、どんな反応を示すか興味がありました。出東小の近くには天満宮があり、二月二十五日はちょうど道真の命日にあたることから話に引き込まれて聞いていました。

最後に感想を聞くと「昔話やお化けの話がいい」という意見もありましたが、「今日のお話はよかったわ。うたのことがよくわかって面白かった」という意見がありました。左大臣や右大臣の話が出た時は「前関白太政大臣」と百人一首の作者名を口に出していました。

## 2 漢字貼り

昨年までと同じように、読む教材には漢字貼りをさせました。昨年の原稿をそのまま使用して（もちろん、加筆訂正することもあります）、プリントするので、その間の労力が省けます。子どもはハサミやノリを使うことが好きで、漢字貼りの時間を楽しんでいるようです。時には自習時間を利用して貼らせることもありますが、後で必ず教師が目を通すことにしています。

## 3 詩の暗誦（こころのうた）

一年生の時から朝礼時間に毎月の「こころのうた」をいっせいに朗誦しています。新しい詩になると初めのうちこそプリントを見ながら読んでいますが、二、三日もするとすぐ覚えてしまい暗誦できるようになります。時には覚えてしまっていても、なおプリントを見ながら口をはっきり開けて正しい発音で朗誦することに力を入れることもあります。

「月のうた」以外のうたを暗誦できる子には暗誦した箇所にシールを貼ってほめてやります。強制は絶対にしませんが、興味のある子は楽しみながらどんどん覚えてしまうようです。「月のうた」だけで終わる子もいますが、全員が少なくとも「月のうた」は暗誦できました。

## 4 授業から

教科書に漢字を貼ってしまったら、その漢字が読めないことには学習が進められません。ですから、

全員がすらすら読めるまで音読をくり返し、くり返し行なっています。教師と児童、また児童同士で〝追いかけっこ読み〟をしたり、全員で揃って朗読したり、席の順で一人ずつ、またはグループ毎に朗読したりして変化をもたせ、興味を持つようにしています。また家庭でもすすんで朗読に取り組めるように、朗読の回数ごとに丸をつけてやり、家の人に聞いてもらい感想を言ってもらったりして音読を奨励しています。

今年度の研究は「読む力を伸ばす指導」です。すらすら朗読できることから、文の読みとりもできているものと考えるのはやや甘い考えで、意外に読みとれていない児童がいます。ですから、どこに何が書いてあるかをおさえたり、ここにこう書いてるから（こんな言葉が書いてあるから）私はこう思うとか、発表が出来ること、つまり考えながら読むことが出来る子どもにしたいということから、このテーマに決まりました。

一学期は自分の考えを持たせるために、まず何度も朗読してなお残る「わからないこと」、反対に何度も朗読したおかげで「よくわかり、みんなに教えてあげたいこと」を見つけさせ、それをみんなに出してもらって解決していく方法をとってみました。

すると意外な子どもが、あっと思うような素晴らしい説明をしてくれたり、反対にこんなことがわからなかったのかと驚かされたりすることが幾度もありました。また子どもの方から鍵となる言葉が出て、それを契機にみんなが深い読みとりをしたという場面も何度かありました。

例ー 詩を読みましょう

イ ちょうちょとハンカチ

一人から「小さな白いものがとんでいく」という箇所から、「小さな白いものって何ですか?」という質問が出ました。すると、当然「ちょうちょのこと」と思っていた子、いや当然「ハンカチのこと」と言う子、さらに「風の子ども」と思っていた子がいることがわかり、教室中が騒がしくなりました。この問題を追求していく中で、ちょうちょとハンカチの関係、位置、様子などがはっきりしてきました。質問の「小さな白いもの」をはっきりさせていく過程でこの詩の読みとりが深まっていったのです。

ロ 波は手かな

「手ってだれの手ですか?」という女子の質問から、この詩の読みとりが深まりました。

例2 苺つみ

熊の「ウーフー」を人間の言葉に直したらどうですかという提案がでました。その際なぜそんな言葉に直したのか理由を文の中から見つけて説明するようにさせました。たとえば「困った声で『ウーフー』といった」のところでは「困った声で」から「困ったなあ」に直しました。ところが他の子が、「なんで困ったと書いてあるかというと苺ジャムとリンゴジャムとどっちが好きって聞かれて、熊はジャムのことを知らないから困ったんだ」というのが出ました。すると「ジャムのこと知っていてもどっちも好きだからどっちに決めようかなって困ることもあるよ」という意見が出ました。さらに熊が「ねえ、さぶちゃん、と呼ばれたとき自分はさぶちゃんじゃないので困ったということもあるよ」という意見も出ました。最終的には「困ったなあ」「どっちにしようかなあ」「ジャムって知らないよ」、また「僕、さぶちゃんじゃないよ」など、いろいろな言葉が集って楽しい学習ができました。

子どもが遊んでいる時や下校中、あるいは読書をしている時などに、ふっと教室で勉強していることを思い出して、もう一度よくものごとを見てみるというように、観察力がゆたかになりました。

――児童の日記から――

六月九日（植田武司）

（前略）すこし行ってみたらたんぽぽがありました。実がだんだんできている時はねころんでいると書いてあったのにそれはうそでした。じゅくしそうになるとねころんでると書いてあってもそれはちゃんと立っていました。ぼくは思いました。ひら山さんはうそをついているかなあと思いました。でも、うそをつくわけないしと思いました。先生どうかおしえてください。（後略）

右の日記は、国語の教科書で、ひらやまかずこ作の「たんぽぽ」の学習をしている頃、教科書に書いてあることと、下校中の道ばたのたんぽぽとちがっていることに気づいて児童が書いたものです。今学習していることに本気でくいついているのが感じられ嬉しくなる日記でした。

## 5 劇づくり

学習発表会で、二年生は自作の劇を発表することにしました。そのねらいは次の通りです。

イ その場面の情景にあった台詞や動作を考える。（行間を読み取る学習と関連づけて）

ロ 役柄になりきって、大きな声で台詞を言う。（音読・朗読の力を伸ばすことに関連して）

題材は子どもたちと相談して国語の既習教材の中から、寺村輝夫作「穴に落ちた象」を選びました。この教材は全員が、何度も読んで慣れていて朗読もうまくなっており、子どもが内容の面白さにも気づいていたから、自分のものとして取り組むことができました。

登場人物を学年の人数に合わせて増やす相談をしたら、象が穴に落ちているのを小鳥が見つけることにしたらどうかという意見が出ました。そこで原作にない小鳥を登場させることにし、また象が穴に落ちる場面を教師のアドバイスで挿入するなど、物語がだんだんふくらんでいきました。

登場人物は、象（1人）、小鳥（4人）、猿（9人）、狐（7人）、かば（5人）、さい（3人）、蜂（1人）と決め、残りの子は初めの場面で観客を物語の中に案内するための寸劇をしたり、地の文を交代で朗読したり、雰囲気を盛り上げるために歌をうたったりすることにしました。役についた子には教科書の情景をもとにして台詞や動作を考えさせ、場面を自分で構成させました。

〈穴に落ちた象を猿が助けようとする場面〉

| （教科書の本文） | （子どもたちが作った場面） |
| --- | --- |
| ・猿が来ました。 | （小鳥たち）お猿さぁん。象さんが穴に落ちているよ。 |
| ・「たすけてあげよう。」 | （地の文1）猿が来ました。 |
| | （猿1）これはたいへんだ。 |
| | （猿2）みんなで象さんを助けてあげよう。 |
| | （猿3）そうしましょう。 |
| | （猿4）一人でだいじょうぶだよ。 |
| | （猿5）6ちゃんにしよう。 |
| | （猿6）はぁい。よいしょ、よいしょ。 |
| | あっ、しまった。（穴に落ちる） |
| ・ところがはんたいに猿が引っぱら れて、すとん。猿も穴に落ちてしまいました。 | （地の文2）ところがはんたいに猿が引っぱられて、すとん。猿も穴に落ちてしま いました。 |
| ・でも猿は象の鼻をのぼって外に出ました。 | （地の文3）でも猿は象の鼻をのぼって外に出ました。 |
| | （猿7）みんなで助けてあげようよ。 |
| | （猿みんな）そうしよう。 |
| | よいしょよいしょ（象を引っぱる） |
| | （猿8）もう、くたびれたよ。 |
| | （猿9）もう、だめだよ。狐さんを呼ぼう。 |
| | （猿みんな）狐さぁん。 |

このように、もとは単純な話も子どもの提案でふくらみが生じ、場面に面白さが出て、グループで動きや台詞の言い力を工夫させ練習させました。結果的には場面を考えたり練習を重ねることによって、何度もその文章を読むことになり、以前に学習した時よりも一層深く読み取ることができ、また読み取ったことを身体を使って表現することもできるようになったのは収穫でした。

またそれまで音読や発表が苦手だった子どもでも、劇の中で大きな声を出したことから自信がついて、授業でも別人のように大きな声で発表できるようになった子もいます。

## 6 漢字への興味

子どもたちは一年生の時から漢字に触れていたので、漢字にはたいへん興味をもっているようです。朝、教師が教室へ来るまでの時間、ノートに漢字を使った言葉づくりをしている子、音や訓や画数を書いて、その後に言葉づくりをする子、さらに漢字の成り立ちにも関心を持ち、新出漢字の学習の際に自分からすすんで説明してくれる子などが大勢います。たとえば「渉」という名前の子は漢和辞典がひけるようになり、ある日「泪」という字を見つけ、目に水で「泪」になるのだとわかりました。

彼は「僕の名前にも〝氵〟があるから、僕はよくなみだ（泪）が出るのかなあ」とお母さんに話したそうです。

作文の時間にはしきりに漢字を使いたがって教師に漢字を聞きに来、たまに教師にもわからないことがあると、「辞典さんに聞いて」と言ったりします。最近では自分で辞典を持って来て調べる子も出てきました。

二年生でも、児童会主催の漢字読み方大会には進んで参加し、三年生に混って満点をとる子も回が進むにつれて増えてきました。

また子どもの日記などから、漢字には意味があるので同じ発音でも使い分けをしなければいけないということに気づくようになったのがわかりました。全体として言葉に対する感覚がするどくなって来たようです。

――例1 苺つみの勉強を終えて――

（江角美紀）

いちごつみの勉強を終えました。とっても楽しい勉強でした。まさひろ君の、「先生、熊の言葉を人間の言契にかえたらどうですか」と、もんだいが出て、それをずっとやっているうちに、楽しいいちごつみの勉強が終ってしまいました。熊さんは、おこったり、かなしいことや、楽しいことがありました。でも女の子がはしらを立てたおれいに、スープやパンやミルクをごちそうしてくれたため、楽しかっただろうと、私は思います。もし私が熊だったら、大よろこびして山のすへ、「ありがとう、ありがとう」とかんしゃしてかえって行きます。

（尾高菜典）

僕は、正博君のおかげでいい勉強ができました。正博君が『ウーフー』を人間の言葉にかえてみたらいいじゃないですか」といわれたから、僕もああそうかと思いました。（中略）人間の言葉にかえてみると熊の気持ちがわかります。「ウッフー」とか「ウーフー」とか、いろいろあったけど、人間の言葉にかえてみたら、すぐ熊の気持ちがわかってきました。（後略）

――例2 「かく」という言葉を「書く」と書いていいのか心配している日記――

二月二十四日（A君）

今日、四時間目のはじめに、書きとりのテストをされました。

はじめが、同じ画数で、最後が東西南北でした。

6番の黒板に顔を書くの書くが、字を書くの書くでいいか、心ぱいでした。

百点だったらいいなと思いました。

（担当 錦織博子・後藤育子）

# 第4章 三年生の実践

## ――漢字（解字）朝礼を中心に――

三年生になると、それまでの「お話朝礼」にかわって、「解字朝礼」を行ないます。四月半ば頃、「先生、漢字朝礼は、まだやらないの」と聞きに来る児童が多くなってきました。それだけ漢字朝礼に対する関心が高く、お話の中に出てきた漢字を教えていくだけの「お話朝礼」とは違って、「どんなことをするのだろう」という期待感がうかがわれました。

しかし、絵と文字の中間に位置する解字を指導する側としては、まず漢字に興味、関心を持たせること、そして、漢字の成り立ち等について、少しでも子どもたちに理解して欲しいと願うとともに、逆にそのことができるかどうか不安でもありました。

「解字朝礼」を始めてひと月ほどして、「反」という字を教えた後、理科ノートに「県版」とあり、それに気づいて突然発表する児童がいるなど、少しは漢字に、目と心を向けてきてくれたようです。そういう児童を、ひとりでもふたりでも多くしていきたいと願っています。

〔一学期〕五月二十日 **手 右 左**（提出漢字）

T 何でしょう?


（板書）

C 手だ!

T 漢学で書くと、

手
（板書）

C 簡単だ。

T 絵と漢字、似てない?

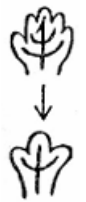
C どこが?…… 似ていない!

T ほら、書いてみよう。


（板書）

C 骨だ！

T この手という漢字は、この形からきていることがわかるね。もっと簡単に書くと、


（板書）

この手は、身体の中で一番よく動くね。

C たべる！ 書く！ なぐる！

T 自由自在に動くことが出来るよ。いろいろな向きに動かせるね。


（板書）

T これは、なんだろうね？

C 右だ！

T そうだね。右という字には、手の部分と、口の部分とがあるね。どうしてだろう？

C ……

T あくびをする時、皆どうする？

C あっ、手を口に当ててする。見られないようにかくす。

C 右は、口があくびをしていて、手を当てるところだ。

T つぎにこれも手ですね。


（板書）

C こんどは左かな？

T はい。

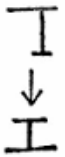

（板書）

C やっぱり左だ。

T 下の方のは何だろう？
C エだ！ エだ！
T はい、説明しましょう。こんなの知ってる？


（板書）

C 大工さんが持ってるやつだ。
T これがだんだん、こんなふうに変わったんだよ。定規はどっちの手にもつ？


（板書）

C 左手だ。ああ、それで左になったのか。
C よくわからない。どうしてそんなふうに変わるの？
T はじめの字は上が大き過ぎて不安定だから、書きやすいように下を大きくしたんだよ。
C ふーん……
T もうひとつやってみます。何でしょう？


（板書）

C ナだ！ 手だ！
T この手についている字を知っていますか？
C 大だ！
C 犬だ！
C 太だ！
T 「大」や「犬」や「太」は違いますよ。
C 友達の「友」だ。
T そうだね。「友」と、それからもうひとつ。


（板書）

Cあッ、有線の「有」だ。
Tつぎは「友」と「有」を勉強しましょう。

**五月二十七日 友 有**（提出漢字）

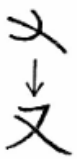
Tこれは何だった？


（板書）

C手だ！
Tそう。これがついている字は全部、手に関係があったね。
C先生、質問！「友」もですか？
Tいい質問だね。もともとこの字はこう書いた。


（板書）

C何だ、あれも手か。
Cあッ、手と手が握手している！
C手をつないでいるんだね。
C助け合っているんだ！
Tそうだね。仲良しさんは、手をつないで歩くね。
C友達だから手をつなぐ。
T友達が困っていると、助けに行ってあげるでしょう。
Cウン、かばってあげる。
Tそう、それが友達だね。それでは、これも「手」だっていうことわかるね。


（板書）

Cはい。それから、有線の「有」にも手がある！
Tそうだね。上の方は手。じゃあ、下の方は？


（板書）

C げつ！つき！

T 「有」の音読みはユウだ。訓読みでは？

C 「ある」だ！

T そうだね。有の月は、もともとが肉で、こんなふうに変化していったんだね。


（板書）

T 肉をもつ→「肉がある。所有」。大昔は、狩りに出かけてイノシシやウサギをつかまえました。

C 食べるため？

T そう。そして、勤物の肉をつかまえて、「オーイ、ここに肉があったゾー」って、叫んで皆に知らせたんです。だから、訓読みでは「ある」って読むでしょう。

C ああ、そうか。手で肉をひろったんだ。

**六月三日　取**（提出漢字）

「又」がもともとは手の意味であることは、前の授業で学習しましたから、すぐにわかったようでした。そこでこんどは、「耳」と「又」を提示してみますと、「手で耳をおさえている」とか、「手で耳を取るのかな」などの声が上がりました。そこで、昔中国では、戦いに勝った者が相手の耳や手をとってその証拠としたので、「取る」という字ができたと説明してやりますと、すぐに納得してくれました。

しかし、「又」のつく字をさがさせてみましたが、これはなかなか出て来ませんでした。

**六月十一日 受**（提出漢字）

「友」や「取」の指導で、「又」は手であることが学習済みですから「受」の「又」にもすぐに反応がありました。「手で何かを受けるんだ」と、すぐ発言がありました。「爫」も手であることを図で表してやりますと、「手と手の中に何かある」「渡すんだ」という発表もあって、結局しっかりと受け取

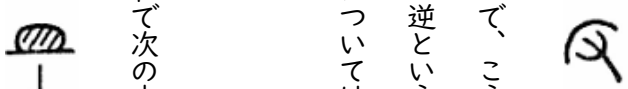
るという意味があることに落ち着きました。

そして、ふたたび「又」のつく字をきいてみましたところ、大坂城の「坂」、最初の「最」、飯塚の「飯」、温度の「度」、友達の「友」などが出てきました。この時に「後ろという字もだ」と発言があって、「夂」と「又」とはちがうことをその時確認したりしました。

「夂」は足に関係することをこの時は触れないでおきました。

**六月十七日　反 板 坂**（提出漢字）

「又」が手の意味だとすると、「厂」はものさしではないかという発言が多く出ました。


（板書）

そこで、こう板書したら弓がそっている状態であることに気がついてくれたのですが、元にもどるとか、逆という意味があることには気がつかなかったようです。

坂については「土がそるってどういうこと」と見当がつきかねたようです。

それで次のような図を描いてみました。


（板書）

この図を見ると「土を上へ上へ積み上げていくと坂になるんだ」ということがやっとわかってきました。

**六月二十四日　飯 最**（提出漢字）

「飯」は、友達の名前から、先々週提示されていた漢字です。「食」と「反」の字がなかなか結びつかず発言があまり出ませんでした。

T この字は？


（板書）

C 最後！最初！

C 野球なんかの最終回。
T 下の部分は前に勉強したね。


（板書）

C 「取る」だ！
T おやつなど食べない時には、布をかけて、ふせておくでしょう。そして、おなかがすくと、つい つい布を取って……
C つまみ食い！
T そう、つまみ食いはほんの少し取って食べるね、たくさんじゃなくて。ほんの少しとか、ちょっ ととか、一番少なく取るという意味があるんです。上の布がこう書かれたんです。

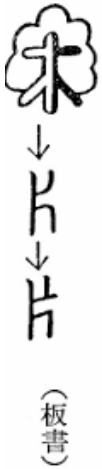

（板書）

C あれはシワだな。
T そして今は、一番……という意味によく使われるんです。
C ああ、だから最初か。

今日は、取り上げた漢字が難しく、児童の発言が少なかったようです。

**七月三日　版　度**（提出漢字）

「版」の字は「一班、二班のハン」とか「ハンコのハンだ」などと言って、見慣れない漢字に抵抗を感じている様子でした。しかし、つくりが「反」なので、「ハン」とすぐに読めました。


（板書）

「片」は木を半分にした小さな切れはしで、印刷する板のことを版というのだと説明しました。
T この字はもともとは、こんな字だったんだ。


（板書）

C なべだ！

C たき火だ！

T 家の中でなべをかけて、火をたいているね。家の中で火を燃やす。昔はずっと火をたいていたんです。消えないようにね。そこから、一つ一つつながるとか、長さをはかるとかの意味になったんですね。

この字の指導の時、「广」は「まだれ」だとすぐに気のつく児童が数名いました。先週、今週と、難しい複雑な漢字が多く提出されたため、児童の発言が少なかったようです。

**七月十五日　近　遠**（提出漢字）

手の指導が続いたことと、複雑な漢字を提示したことで、児童の意欲が、やや薄れてきたように思われたので、今月に入って「辶」の指導をすることになりました。

「今日は」と言った途端に、「また手じゃ」と不満の様子です。そこで「辶」を板書してやりますと意欲的になってきました。



（板書）

しんにょうには、「行く」という意味があることを教え、「近」と「遠」の指導に入りました。

T これは何でしょう？



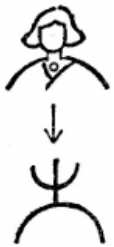
（板書）

C 木が折れている。

C おのだ、おので切るんだ。

T これに進む意味のしんにゅうをつけて、おのを近づけて行く。ものの近くまで行くという意味で、「近」という字。

こんどはこんな絵を描いてみよう。服をゆったりと着る。



（板書）

Ｃゆっくりと行く。急がずに行く。

Ｔゆったりと遠回りして行く意味で、「遠」ですね。

しんにょうのついた漢字はたくさん知っていました。「道」「遊ぶ」「通る」「達」「進行」「運ぶ」などです。

――一学期を振り返って――

冒頭にも書きましたように、児童たちは今までの「お話朝礼」から「解字朝礼」になって、どんなことをするのかとても楽しみにしていました。それに今後四年間続ける「解字朝礼」の始まりということもあって、指導に不安がありましたし、どうしても慎重にならざるをえませんでした。

そこで、第一回目は、昨年の資料を見たり、研究部と相談したりして、「手」「右」「左」を提出することにしたわけです。

第一回を終えた後の児童の感想では、「お話朝礼」と「解字朝礼」とは全然違いました。「いろいろなことがわかっておもしろいです。手が右や左に関係があるなんて、はじめてわかりました」といったことをほとんどの子が書いており、文字そのものに意味があることに驚いた様子でした。そしてそのことがより興味をそそり、関心を一層高めたようです。

そして二回目からは、「手」に関係した漢字で、児童がよく知っている字を提出した方が興味も湧くだろうし、意見もよく出て深まりのあるものになるだろうと考えて、児童から出た漢字を提示し、その成り立ちを指導してみました。しかし、どうも指導側が考えたほどの反応がなかったように思われます。それは児童が出した漢字でも、やや複雑な成り立ちの漢字を、あえて解字指導したことが原因していたと考えられます。

七月の終わり頃に、「解字朝礼」についての感想を書かせました。意味や成り立ちがわかって楽しい、漢字がお話朝礼の時より覚えやすい、といった感想がほとんどでした。

一方、少数ではありますが、次のような感想を持つ児童もいました。

・一つの漢字をもっとくわしくやってほしい。

・むずかしくなってきた。もっと簡単な字を教えてほしい。

・先生が一つの漢字を早く言われるから、むずかしい。もうちょっとおそく言ってもらいたい。そ

うすればわかります。

・いろいろな漢字を見つけないといけないからむずかしい。

提示する漢字は一回につき一つから三つでしたが、時間的なことを考えると、毎回一つに絞った方が児童の思考時間も十分に取れるし、効果的と思われますので、二学期からは原則として一つにすることにしました。つまり児童の実態と漢字の質的なものを考慮して提示していきたいというわけです。また子どもたちの感想はいずれも「指導法」で解決出来ることだと考えられます。

それから「こんな漢字を教えて欲しい」という希望も出てきました。たとえば、

・私の名前の由紀の「由」をやって下さい。

・うかんむりとか、ごんべんも勉強したい。

・「尸」の勉強したいです。（自分の名前についている児童から）

・自分の名前の漢字が知りたい。

というように児童にとって最も身近にある漢字、つまり名前にある漢字に格別関心を持っています。それは「手」のシリーズをやった時も、自分や友達の名前があがっていたことからもわかります。そこで二学期は「手」「足」に関連づけながら、児童の希望も取り入れていきたいし、また「解字朝礼」の時間だけでは、子どもの名前にある漢字の解字は無理なので、誕生日とか、あらゆる機会をとらえて指導したいと思っています。ますます漢字の成り立ちのおもしろさに触れ、漢字に対する興味を喚起していきたいと考えているところです。

「漢字貼り」については児童の感想をまとめてみたところ、貼る枚数が「多い」ということをほとんどの児童が書いていました。それでも何とか時間内に貼れる児童がほとんどで、出来ない者は各学級二、三名というところでした。

三年生の漢字貼りの枚数は五十枚を基準としており、これまでに貼る枚数が最も多い単元で四十八枚でした。その基準からすると、無理な枚数ではないのですが、二年生の時に比べて字が小さくなり、切ったり貼ったりするのに時間がかかることから「多い」と感じているようです。そこで、貼る枚数を五字から十字減らすことも考えてみましたが、児童が特に負担に感じている様子でもないし、学習を進めて行く上で支障をきたすほどでもないので、そのまま続けることにしました。おそらく慣れて

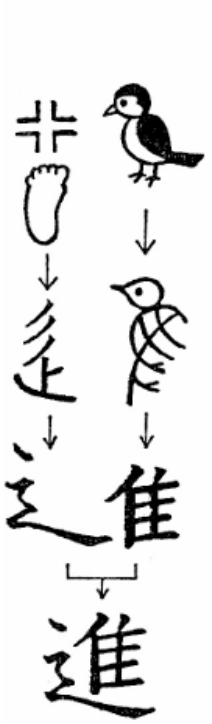
来れば全員時間内に出来るようになるだろうと思います。

〔二学期〕**九月十六日 遊**（提出漢字）

しんにょうにはどんな意味があったのか、ほとんどの児童が忘れていました。しかし図を書いて説明しますと、すぐに思い出したようです。

「遊ぶ」の中にある「子」の字から連想して「子どもがあっちこっちに行って遊ぶんだ」などの発言がたくさんありました。

**九月三十日 進**（提出漢字）



（板書）

進むという漢字であるということが思ったより早くわかったようです。鳥は上手に飛ぶことから、前にうまく進み行くという意味になりました。

**十月七日 休**（提出漢字）

T にんべんには、もともとどんな意味があるのかな？

C 人の意味。

T そう。ではこれは？



（板書）

C 木だ！

C わかった。休む、だ。にんべんに木だもん。

人が仕事をしていて、疲れたから木の陰で休むということに全員がすぐに納得しました。偏の中でにんべんは、児童にとってかなり身近なものだったようで、にんべんのつく漢字をたくさん発表してくれました。「健」「俊」（名前から）、「体」、「僕」、「仕」、「作」などです。

**十月二十八日 健**（提出漢字）

この漢字の中に以前習った「手」があると言いますと、不思議そうにしていましたが、解字をするとすぐに気がつきました。「聿」は手で何かを持っている、エンピツか筆かをまっすぐ持つ、という発表があり、「廴」（行く、歩く）「亻」（ひと）から、健康でなかったら、筆をまっすぐ持つとか、歩くとか出来ない、という発言が出ました。

友達の名前にある漢字は、やはり興味があるようです。

**十一月十一日 北**（提出漢字）

T さて、何だろう？



（板書）

C ひと！

C 坐っている、背中をむけて。

C 何で背中をむけていると北になるんだ？

C 北は、もとは背中の字なんです。寒いと人は太陽の方を向きたがる。そうすると背中はどっちの方に向く？

C わかった。南の反対だ。

C それで北か。

**十一月二十五日 比 化**（提出漢字）


（板書）

同じ方向を向いているから、並んでいる二人を比べていることにはすぐ気がつきました。が、化けるという字については、なかなか納得がいかないようでした。

「匕」は人が倒れる形で、「化」は「人が倒れて死ぬこと」→「様子が変わる」→「ばける」と説明

しました。「花という字は草が化けて花になったんですか」と最後に発言がありました。

**十二月二日 見**（提出漢字）


（板書）

この板書から、「見る」であることはすぐわかりましたが、「儿」も〝ひと〟であることに、「意外だ」という表情でした。

**十二月十六日 兄 元**（提出漢字）

T 人に頭がつくと、何でお兄さんなんだろう?


（板書）

C 兄弟の中で一番上で、大きいから。

C えらいから、いろんなことを知っている。

「元」は「儿」（ひと）と「二」（上）から、人の上の部分をさし、頭を意味して、転じて「先端」「最初」の意味になると解字しました。

〔三学期〕 **一月十三日 冬**（提出漢字）

三学期は手や足や人にこだわらず、児童の興味をひきそうな漢字をいろいろやってみることにしました。

T 冬という字はどうやって出来たのだろう?


（板書）

C 垣根に雪がつもっている。

C 何かひっかけている。

C 柿じゃない?

C おいしくなる。
C 取っておく。
C 長持ちする。
C わかった。食べ物を長持ちさせて、それをためておくと、冬にも食べられる。
T そうだね。下の「冫」は何？これはもとは「冫」だよ。
C 水に関係がある。
C わかった。氷だ！
T そう。「冫」は氷とか冷たいもののことです。冬から連想すること何？
C 寒い、雪、つらら、霜柱、こたつ、あられ、流氷、なだれ、雪だるま、かまくら、雪合戦、なだれ。

冬から連想するこれらの字について、漢字で書けるものを調べ、廊下の黒板に書いておくように指示しておいたところ、休憩時間にほとんど調べて書いてありました。

**一月三十一日 寒 雪**（提出漢字）

T さて、この字はわかるかな？



（板書）

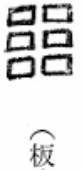
C あ、寒いだ。
T この字を見て、気のつくことない？
C 冬と同じで、点々が二つ付いている。
C 氷だ！
C 冷たい！
T これは何？


（板書）

C 干すものだ。
C ひげ！
T では、これは？


（板書）

C うかんむり！
T では、これは？


（板書）

C 窓！壁！
T では、これは？


（板書）

C 両手、手だったのか。
C わかった。大風が来て、壁についたつららなんかを落としている。
C そんなら何で、氷が下にある。
C 石がくずれないように手で支えている。寒いけど頑張って。
C 石と石のすき間を風が来ないように、手でふさいでいる。
T そうですね。もう一つ。「冬」という字からいろんな言葉を出してくれたその中に、「雪」があったけれど、音読みはどうかな？
C セツ！
C 下のヨが手で、雨は落ちてしまうけど、雪は手の上にのる。
T そう、雪だったら？
C つもる。
T 「雨」のつく漢字は？
C 霜、霙、雨、雲、電、雷、霧、霰。

Tどのくらいあるか調べてみたら、五十くらいありました。次の漢字は 何て読むのか、調べて、また黒板に書いておいて下さい。雫、震、霊、霞、露、靄。

**二月十七日 球 班**（提出漢字）

T来週の水曜日には何かあるの？

C卓球大会！

Tだれか漢字で書いて下さい。

Cはい！

T球の訓読みは？

Cきゅう、たま、だ。

T球のつく熟語は？

C野球、直球、水球、地球、球技、変化球。

Cボールという意味だ。

T地球はボールじゃないよ。

Cわかった、まるいという意味。

Tそうですね。「求」はこういうことです。



（板書）

C動物の皮でボールが作ってある。

Tそうです。ぎゅっとしまったボールという意味があるんです。つぎに王偏がついた字、知ってるかな？

C一班、理科。

C玲子。

Tものを二つに分けるには何がいる？


（板書）

C ほうちょう！ ナイフ！

T そうだね。「刂」は刀と同じ意味があります。



（板書）

C 班は玉を分けるという意味か！

**二月二十四日 開 閉**（提出漢字）

この字は四月、図書館指導の際、解字で指導を受けていたので、すぐに思い出しました。かんぬきを両手で持ち上げて、かぎをはずすから、「あく」で、閉はかんぬきを竹や捧で支えているなどと活発に発言していました。門がまえの漢字を廊下の黒板に書くよう指示したら、黒板いっぱいに調べて書いてありました。

――一年間をふりかえって――

漢字朝礼は、まず「手」の指導からスタートをし、「足」、「人」シリーズへと進めていきました。そして、三学期に入ってからは、季節や学校行事と関連させながら、児童の興味を引きそうな漢字を選んで指導していきました。

そして、とにかく欲張らないように心がけ、提出漢字は一つ、多くて三つにし、取り上げる部首も数をしぼり、手では「扌」「又」「爫」「ヨ」「彐」、足では「辶」を、人では「匕」「匕」「亻」「儿」を中心に指導してきました。

また必ず前の週に学習した漢字の復習をしてから、次の漢字へと進みました。忘れている児童も多いので、年間を通して、「漢字朝礼」でした既習漢字を教室内に提示しておくなどの方法も必要かと思われました。

「厂」ががんだれ、「尸」がまだれであるとか、「辶」がしんにょう、「斤」がおのを表わしているなどに興味を持って取り組み、「漢字朝礼」を楽しみにしている児童ほど、漢字への知識も深いようです。

また 一年間の反省を書かせましたところ、「調べておきたいので、次の漢字朝礼では何の漢字をやるのか言っておいて欲しい」などと意欲的な子どももいました。しかし、はっきり「漢字は苦手」と言っている児童もおり、今後の課題であります。

「漢字貼り」については、教科書を一読した後に貼ることにしているのですが、個人差があり全部貼れない児童もいます。しかし、児童は「漢字貼り」に意欲的で、そこには早く貼り、早く終ろうとする競争心と、見たことのない漢字が読める面白さ（満足感）、そして教科書が漢字で一杯になる楽しさがあるからだろうと思われます。

ところが、時間内に貼り終わるのが精一杯で、貼りながら全文を読み通していくことには無理がありました。児童の多くは、貼り込み用にプリントされた漢字を単に教科書に貼るという作業をしているにすぎないようにも感じられるところがあります。幾度も読んだ後に全文を通して読み、思考しながら、時間をかけてゆっくり貼った方が効果的かもしれないとも思われます。

この一年間の漢字教育で感じたことは、子どもたちが辞典を引くことを苦にしないこと、どんな漢字を板書しても「習っていないから」と絶対に尻ごみしないこと、また〝漢字貼り〟も当たり前のこととして積極的に取り組み、〝心の歌〟を簡単に暗唱してしまうことでした。

これまでは、「三年生だからまだ辞典は早すぎる」とか、「習っていないなら平がなで」という考え方をしていました。しかし、この一年をふりかえってみて、われわれは子どもの能力を過少に評価していたことを反省せざるをえません。子どもたちは大人の想像以上の能力をだれもが持っています。「小学生だからこの程度で」と考えるのではなく、「小学生だからこそ今やらないと」と考えて、今後も頑張って、楽しい授業を展開して行きたいと思います。

（担当 足立真司・木次柴折）

# 第5章 四年生の実践

## Ⅰ 漢字朝礼

今年の四年生は低学年の時に「お話朝礼」で、三年生からは「解字朝礼」で、すでに漢字を学習してきています。特に三年生の「解字朝礼」では提出漢字も多く、漢字の部品の意味をつかんだ上で、漢字の全体の意味を考えていくことを経験しています。また漢字に対する興味・関心も高く、教師の発問に対して鋭い反応がありました。そこでこの四年生には次のことに留意して、解字朝礼を実践してみることにしました。

① 直観的にわかりやすい漢字を提出する。
② 新出漢字をできるだけ取りあげる。
③ 熟語や短文作りにも力を入れる。
④ 提出漢字は反復して取りあげる。

〔一学期〕五月十八日〈三年の復習〉

・解字朝礼の時の約束は次のとおりです。

イ 返事をしてから手を挙げよう。

ロ 手は黙って挙げよう。

・「手」の復習




手＋口⟶右 手＋エ⟶左 手＋手⟶友

人＋手＋心⟶急 捧＋手⟶受

第一回目の「解字朝礼」でしたので四年生になってからの〝約束〟や三年の「解字朝礼」で習った漢字を復習したりしました。

**六月一日 園**（提出漢字）

T この前の時間は何を勉強したの？

C 三年までの復習。

C 友！

C 急！

T 今日の勉強は「園」です。この「口」は何を表わすのだろう。

C おり！

C 動物園全体！

T 「かこむ」という意味を表します。「くにがまえ」です。その中の「袁」はどんな意味ですか？

C 土と人！

C 猿！

T 衣です。着物のことですね。「口」は何を示しますか？

C すそ、えり、うでわ、おび。

T ゆったりと囲むという意味です。「袁」は畑や庭を示します。全体として、畑や庭を囲ったものを表わします。そこから人がたくさん集まるような、まわりをかこまれた場所を表わすようになりました。

〈熟語〉公園・遊園地・動物園・幼稚園・保育園・学園・公園・植物園・ぶどう園

くにがまえの意味や名称はよくわかっていたようです。「遠足」という熟語を、発音が同じなので「園足」と書いた児童がいたので、「辶」の意味から「遠」を使うのが正しいことを指導しました。

**六月十日 験**（提出漢字）

T 今日の勉強は「験」です。この漢字が読めますか？

C ケン！

T どんな意味か知っている人？

C 検定試験の「験」。

T 漢字の形から考えてみよう。（馬をさして）これは？
C 馬！
T 昔はこうだったんだ。




C 馬の足とたてがみがある。
T 「僉」の成り立ちで、三角のものは集まる印。箱形のはなんだろう？
C 口だ。
T その下の方のは？
C 人がたくさん集まっている。
T これ全体ではどんな意味になりますか？
C たくさんの人が集まって相談する。
T そう、たくさんの人の意見をまとめる。それでは、右側と左側を合わせて考えてみると、馬が集まる。そして集まった馬の中でどの馬が速いか実際に走らせてためしてみる。このことから、「ためす」「調べる」という意味になってきたのです。「ケン」と読む漢字にはどんなものがありますか？

・子どもから出た漢字――検（検査・検定）、剣（剣道）
・教えた漢字――倹・険

「僉」のつく字は「ケン」と読めることを教えたところ、教師から提出した「倹」や「険」も「僉」がつくのでよく読めましたが、意味については深入りしないようにしました。また「験」の指導では「僉」の部分の意味がむずかしかったようです。

**六月十五日 検 倹**（提出漢字）

T 今日は「検」を勉強します。「木」は何偏ですか？
C きへん！
T 「僉」はどんな意味でしたか？

C 集める！

T 「木を集めて調べる」ということになるね。この「木」は昔はどんなものだったかな？

C 机！

C 紙のかわりに使われていた。

T そうだね、紙です。みんなが使っているノートも紙ですね。ここでは書き物、つまり書類です。意味は書類を集めて調べることです。

T 倹約の「倹」の意味を考えてみよう。これは人が相談して意味を一つにまとめるように、集めてむだがないようにすることです。つまり、むだ遣いをしないことです。

・子どもから出た熟語――検印・検定・検査

先週から「僉」のつく漢字の読み方と意味を考えさせてきました。「ケン」という読み方はよくわかってきたようですが、意味を考えることはあと一歩というところです。「検」の木偏は机や紙という意味があることはよく覚えていたように思われます。全体に三年生までの学習が生かせたと考えられます。

**六月二十二日 衛 違**（提出漢字）



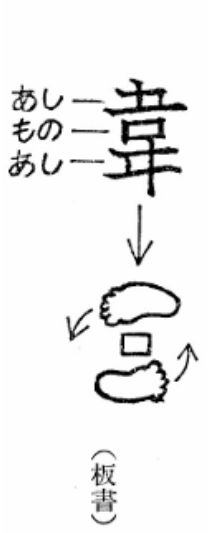
T 今日の勉強は「衛」です。どう読みますか？

C 衛生調査の「エイ」です。

T 「行」の意味わかりますか？昔はこうでした。

C 交差点、十字路！

T 「韋」の意味はどうですか？




C 「<u>五</u>」や「<u>牛</u>」は「あし」。

C 「口」は「もの」。

T 交差点をぐるぐる回る。何か悪いことをするものがいないかとぐるぐる回ってみる。熟語では「守衛」があります。「韋」はどう読みますか?

C……

T 「イ」と読みます。では「違」、この漢字はどう読みますか?

C イ! ちがう!

T では、意味を考えてみよう。絵をかいてみると、



(板書)

だから、すれちがう。ということは、反対方向に進むということなので、「ちがう」という意味になります。

今回の提出漢字は三年生の「解字朝礼」で学習しているものだったので、大多数の子どもから「衛」の「行」の意味、「韋」の成り立ちが出てくると予想していたのですが、忘れてしまった子がほとんどで意外でした。やはりくり返してやることが大切だということが痛感されました。「違」は意味や読み方はほとんどの子どもたちが知っていたようです。

**六月二十九日 査 助 祖** (提出漢字)

T 「偉」や「緯」はどう読みますか?

C 「イ」

T この漢字「衛」はどんな意味がありますか?

C パトロールする。

C 十字路!

T それでは、今日の漢字は検査の「査」です。上の部分は「木」だね。



下の「且」は何だろう。地面にものをかさねるという意味です。木を重ねるとは?

C わかった、関所だ。テレビでみたことがある。

T 昔の関所は木の柵で道を通る人を止め、あやしい人や物を調べました。だからこまかく調べるという意味になりました。それでは「助」の意味は？

C 力を重ねる、助ける。

T 「祖」は？「礻」は？

C 神様！

T 神様が重なる。おじいさん、またそのおじいさん、というふうに重なる、先祖です。「査」の「木」が何を表わすかがわかりにくかったようですが、「且」の意味はつかめて「助」や「祖」の意味もよく理解してくれました。

**七月六日 門 開**（提出漢字）



T 読めますね。

C もん！

T 音読みは「もん」、訓読みは？

C かど！

T では、この字は知ってますか？ 音読みで読んで。



C かい！

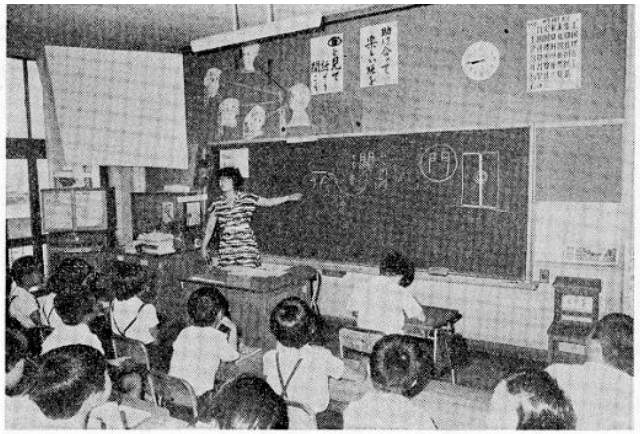
T 訓読みでは？

C ひらく！

T 門の意味は知っている？



C 西部劇に出てくるやつ！



解字指導風景

T どこの国で生まれたの？
C 中国！
T 中国の門はどんな門か知っている？
C 万蔵寺の門のようなもの。
T お寺の門は大きくて重いですね。門のなかの方、手がどうなってる？



C 外に開く。
T 手の上にあるものなんですか？

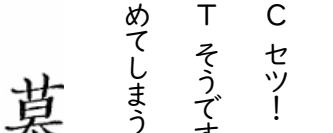


C かんぬき！
C かぎ！
T 手でかんぬきをはずし、門を開くという意味になるね。それでは、「開く」の反対の言葉は？書いて下さい。
C 閉。
T 読み方は？
C とじる！
T しめる！

「門」や「開」については子どもたちは成り立ちをよく知っていて、活発に意見を発表しました。

〔二学期〕**十月二日 折 墓**（提出漢字）

T この字の読み方は？




C おる！

T そう。では、音読みを知っている人？

C……

T じゃ意味は？

C 手で折る。

T 意味は「折る」。何を？

C 竹！

C 紙！

T これはおので何かを折っていますね。それでは「折」のつく熟語を知っていますか？ 光に関係がある言葉で？



C くっせつ！

T そうですね。こう書きます。そうすると音読みはどうなります？




C セツ！

T そうです。この字は「おる」という意味の他にも別の意味があります。〇〇君がたいぎになってやめてしまうということから、「くじける」という意味です。次に、これはどうでしょう？




C はか！

C 「ぼち」の「ぼ」。

T この意味を考えてみましょう。
C 草がはえていて、土地の下に人。
T そう、まずこうだね。



C くさ！
T その下は？



C お日さま！
T そう、そのまた下は？



C やね！
C これも「草」だ。
C お日さまを草でかくしている。
C 草の中に太陽が沈むとどうなる？
C くらい。
T 「莫」の下に「土」がある。
C くらい土の下に人がうまっている。
T それで「墓」の意味がわかりましたね。くらい土です。

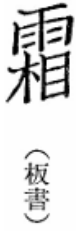
**十一月二日 相 霜**（提出漢字）

T クイズをします。草の下にある楽しみなものは？
C くすり（薬）！
T 水に点をつけたら？

C こおり（氷）！
T 羊が大きくなったら？
C うつくしい（美しい）！
T ロが三つ集まったら？
C しな（品）！
T 目があって、遠くに木がある。そして遠くの木を見ている。


（板書）

C 「手相」の「相」だ。
T どんな意味？
C……
T 下に「心」をつけると……
C そう！
C 「想像」の「そう」。
C 「感想」の「そう」。
T 意味を考えると、心の中で見る、心の中でいろいろなことを考えてみる、思いうかべるという意味があります。もう一つ。なんと読みますか？


（板書）

C つゆ！
C しも！
T 「しも」ですね。音では「ソウ」。これは寒さで水分が霜になる。他に「相」がつくもので「箱」があるね。

**十一月九日 忘 盲**（提出漢字）

T 今日はこの文字、どう読みますか？

忘（板書）

C 忘れる！

T これは音読みか訓読みか？

C 訓！

T どうして忘れるという意味になるかというと、

忘 わすれる ボウ （板書）

ものの後ろにかくれる。見えなくなる。次に、

忙（板書）

これは、いそがしいとか、ボウとかいったね。心がなくなる。だからゆっくりと物事をするゆとりがなくなる。もう一つ。

盲（板書）

目がなくなる。だから目が見えない人を盲人という。

**十二月七日 看 省 秒 砂 妙子**（提出漢字）

T これは何という字ですか？

看 護婦（板書）

C かんごふ！

T 熟語は他にありませんか？

C かんびょう！

T 下の方は何かな？

C 目！

T 上は？
C 手だ。
T よく知ってるね。手と目でどんな意味になる。遠くを見る時どうしますか？
C 手をふる。
C 手でひさしを作るようにする。
T そう、だからよく見るという意味があります。もう一つは、よく見まもる。「見」の方はただなんとなく見るのだよ。看護婦さんは病気の人をよく見る。黒板をよく見る人は「看」。何となく見ている人は「見」。もう一つ、「看」を使った熟語を知ってるね。「看板」もそうだね。さて、次は。



C セイ！
T 「セイ」のつく熟語を知っていますか？
C 反省！
C しょう！
T 「しょう」という読み方もあるな。〇〇省。みなさんは「反省」で勉強したね。これにはどんな意味があるかな？下は目がついているね。上は？
C 少ない！
T そう。「少」はそそぐという意味があります。



斜線のところをけずると、けずりかすが出ますね。省というのは、少はけずって量を少なくするという意味があり、けずるとだんだん小さくなるから、小さいという意味ができた。「少」がつく漢字は、すくない、小さいということ。たとえば「秒」は、時間の短いことをいいます。それから、これは？



C すな！

T 石が細かい。「妙子」というのは若い小さな女の子の意味で、若い女は美しいということから美しい人という意味になります。最後に「省」は小さい目をして細かい所まで見る。むだがあるとはぶく。よくふり返って見るという意味になりました。

**十二月十八日 直 置**（提出漢字）

T 「直」は目でまっすぐ見ることからできた。



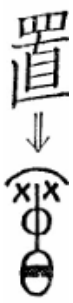
C 自ら、のぞく。

C ちょく！

T だんだん変化してまっすぐな線。まっすぐとか、まわり道をしないという意味です。ここに「木」がつくとどんな意味になりますか？

C うえる、まっすぐに。

T 本をまっすぐに植えるという意味だな。もう一つ！



C おく！

T この上は？

C 物！

T 「四」の部分は？

C あみ！

T あみをまっすぐに立てる。このあみは魚をとるあみではありません。

C 畑にたてる。荒らしにくるものをとる。

T 鳥をとるためのものだな。

**十二月二十一日 包**（提出漢字）

T 今日は、この字！


（板書）

C ホウ！

T 己は？

C つつまれるもの。

T 勹は？

C つつむもの。

T 己ができる前はこうだった。


（板書）

C 人間だ！ 腹の中の子。

T 音は？

C ホウ。

T てへんがついた「抱」は？

C だく。

T 手でつつむようにしっかりだく。他には？

C 大砲の「砲」です。

〔三学期〕 **一月二十五日 召 昭 照**（提出漢字）

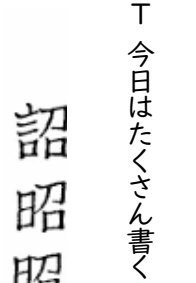
T 三年の復習をしてみよう。


（板書）

C わかった、ハン！

〈三年の復習〉反のつく字――飯、板、坂の読み。

T 今日はたくさん書くが、このうちで、共通しているところは？




C 召！

T 音はどう読みますか？

C ショウ！照明の「ショウ」。

T どれも「ショウ」と読みますね。意味を考えてみよう。まねき猫の手はどうなっていますか。手で人を呼ぶ時、コイコイとこうする。




C 口で人を呼ぶ。

T 何を呼ぶ？

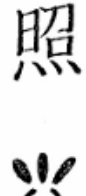



C 日を呼ぶ。

T 太陽を呼ぶと明るくなる。昭和とは？

C 明るくて平和という意味。

T それではこの意味を考えてみよう。




C 太陽の光がこんなふうに照らす。

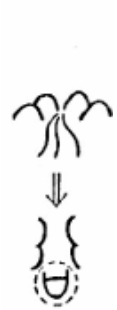
T 太陽の光はいつ照らすの？昼ですね。太陽が照らない夜には、昔はどうしました？

C たき火！

T そう。夜は火、昼は太陽ですね。

**二月十日 谷 欠 欲**（提出漢字）

T 今日は山を書いてみよう。


（板書）

C 谷！

T みんなで考えてほしいところは、点線で囲ったところ。ここは何を表わすだろうか？

C 川のふち。

T くぼんだところ。これにさんずいをつけると？

C あびせる。

T くぼんだ所で川の水が流れている。くぼんだ所に入って体を洗うこと。熟語は？

C 海水浴。

T 海の水で体を洗うこと、それから「入浴」もあるね。つぎに。


（板書）

点線で囲んだ上の部分が人が口をあけている〝頭〟、その下の部分はひざまずいている〝足〟で「欠」という字。あくびとか、腹がひっこんでいる、食べ物がほしいんだな。だから「欲」の字ができたんだ。

**二月十五日 河**（提出漢字）

T 今日は、これ。


（板書）

C カ！

C さんずいをつけて「かわ」。

C 可能性！

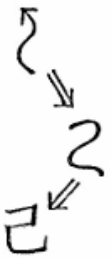
T そう「可能」の「可」ですね。意味を考えてみます。これは直角に曲がっていますね。でも、たくさんおしゃべりすると声がかすれてくるね。


（板書）

このように何度もくねくね曲がってやっとできた、黄河という大きな河が中国にあります。この河は直角に曲がっている河です。今では大きな河という意味に使われます。

**二月二十二日 己**（提出漢字）

T 今日はこういう目印。


（板書）

C 己！

C 己！

C 己！

T わかりましたね。読み方はわかりますか？「キ」とか「おのれ」とか「コ」とも読むね。注意されるとはっと気がつきますね。はっと起き上がることから「自分」という意味になったそうです。たとえば「和紀」（かずのり。児童の名）の「紀」だが、他には？

C 日記の「記」。

C 改造の「改」。

C 起きる。

T 「紀」はどんな意味か？

C 二十世紀！

T 「糸」は？

C いと！

T 糸をまく時、最初に目印した所から巻く。物事の始めという意味があります。「起」の「走」は？

C 走る！

T 注意されると起き上がる。足の動作を表わします。「己」のつく字と 熟語は？

C 日記、記録、改良、大平記、起床、昆虫記、書記、記事、伝記。

**三月一日**〈復習〉

T 二学期と三学期にどんな字を勉強しましたか？

C 谷、浴びる。

C 己のつく字。

C 起、記。

C 昭。

C 可。

T 今日は漢字しりとりをします。

浴、起、記、昭、折です。たとえば、泳→海→敏→牧のようにやります。この中のどの字からスタートしてもいいです。

（班ごとに競争。十分後に集めた漢字例）

〈記〉→語→計→話→読→続→細→組→紀→級→給→拾→特→待→行→衛→違→道→遠→園→国→図→回→固→湖→沼→海→泳→清→洗→治→浩→池→地→場→坂→板→校→林→村→松（四十一字）

〈浴〉→河→治→海→湯→泳→消→池→他→休→体→化→花→草→葵→荷→芽→暮→暑→星→昭→時→侍→待→徒→行（二十六字）

〈記〉→誠→語→話→活→海→泳→清→洗→治→浩→池→地→場→陽→湯→治→温→油→沼→昭→時→明→暗→間→開→閉→聞→問→鳴→嶋→崎→岸→炭→秋→和→稲→科→料（三十六字）

――子どもの感想――

・私たちの漢字朝礼は毎週火曜日にあります。ふつうは漢字の意味を調べたり、なりたちからやって、今使われている漢字にしたりしていったこともあります。だけど、三月一日にあった漢字し

りとりもいいと思います。その漢字しりとりを一学期に一回ずつやったらいいと思います。だけど、ふつうやる漢字朝礼もなかなかおもしろいです。（持田美穂）

・今までの漢字朝礼は、ただ成り立ちばかりを勉強していたのでおもしろくありませんでした。漢字のしりとりをしたり、漢字をあてっこしたりして、漢字朝礼が楽しくなるようにくふうしてやった方がいいと思います。（三宅ゆかり）

・私はあまり発表しなかったが、いろいろくわしいことがよくわかってよかった。どうしてできたかとか、意味などがわかりやすいように教えてくださった。漢字のしりとりが一番よかったと思います。漢字のしりとりをしていると、前にならった漢字のふく習をしているみたいで、とてもいいと思いました。（福島真由美）

・漢字朝礼はいろいろな漢字をやるけれど、意味やいろいろなことがわかります。成り立ちの最初は何という字ができたかわからないけれど、だんだん形をかえていくとわかってきます。それにとても覚えやすくていいです。（堀内真弓）

――その他の感想――

・ぼくのきらいな漢字だけど、漢字朝礼で漢字がわかった。

・しりとりだけでは、漢字の意味や成り立ちがわからないので、ヒントを言ってあてるようにすればよい。

・四年生になって、漢字朝礼がむずかしくなった。

・漢字のしりとりはよいけど、書くことや読むことはきらいです。

・もっと時間を長くして、くわしく教えてほしい。

・もっとわかりやすく、ゆっくり教えてほしい。

・月に一回くらいクイズみたいなものをやってほしい。

――反省――

一年間をふり返ってみると、期待していたほどの反応はみられなかったようです。解字に対する新鮮さがなくなったことや、いつも同じ指導法であったためかと考えます。三月一日の「漢字朝礼」では漢字のしりとりをやってみたところ、子どもたちは大変意欲的に、活発になりました。やはり、指

導のしかたを工夫しないといけないことを改めて思い知らされました。また、提出する漢字を何にするか、子どもたちにどのような活動の場を与えるか、これらをいつも念頭において指導してきたのですが、まだ不十分であったようです。

## 2 漢字貼り

「漢字貼り」は主として読みの教材で実施してみました。今までの漢字貼りの原稿を使って印刷しました。準備の手間が省けて大変よかったと思います。

――子どもの感想――

・漢字貼りはわからない漢字があると教えてもらうので、次々に漢字がわかるのでうれしいです。これからももっと漢字貼りがしたいです。（古川友美）

・漢字貼りをして読めない所もあるけれど、漢字貼りをするとすぐに漢字が覚えられるのでいい。またわかりにくい字も読めるようになるので、これからも続けてほしい。（足立恵美）

――その他の感想――

・むずかしい漢字の横には、ふりがなをつけてほしい。

・漢字の数を少なくしてほしい。

・何行目かを書いておいてほしい。

・字の大きさや印刷をはっきりさせてほしい。

子どもたちは喜んで漢字貼りを行っていましたが、字の大きさやふりがなをつけることや印刷のことは検討する必要があるようです。

## 3 詩の暗誦

――子どもの感想――

・一年生の頃から、今までずっと心の歌や百人一首を沢山覚えている。

・今まで通り、学級で覚えてから体育館でとなえたい。

（担当 園山隆政・浜崎由美）

# 第6章 五年生の実践

この一年、「解字朝礼」、「漢字貼り」、「心のうた」など学習を子どもたちと共にしてきました。学習に対する子どもたちの受けとめ方はさまざまですが、心に残ることがいろいろあります。山東小の漢字教育に誇りをもっている児童がいること。「深切」は「親切」の誤りであろうと注意したところ「辞典にありました」ときっぱり言える児童がいたこと。国語の授業中、同じ「まく」でも水をまくの「まく」は手で水を散らすので手へんに散るの「撒く」で、種をまくのは、まいて時が経つと芽が出るので、草かんむりに時と書いた「蒔く」と発表してくれたこと等です。

漢字をじっと見て語意を考え出す、逆に言葉の意味から字形をみつけ出す学習態度は、他の学習にもつながってきます。そして発見する喜びが能動的な態度となってあらわれ、さらに学習をおし進めていくことをねがっています。

高学年の「解字朝礼」では、扱う漢字が児童にとって身近なものであり、解字の説明になるほどと納得し、わかり易く興味をもって学習できるということが大切です。そのためには教師の方が解字に精通し、幅広い国語力、語彙力を持つことが絶対の必要条件になると思います。児童の「解字朝礼」に臨む姿勢も、消極的なものから積極的なものとさまざまなので、取り上げる漢字をえらぶことから慎重でなければなりません。

「解字朝礼」について児童の受けとめ方には、朝礼のある日が楽しみだ、難しい漢字の方が面白い、朝礼の日をふやして欲しい、もっと長時間やって欲しい、また朝礼の場所が狭く多人数になるとさわがしくなる、など多様ですが、きわめて積極的でありました。また「解字朝礼」のリーダーをつとめ、「えらかった」ともらした児童がいましたが、誰もが一回は経験した方がいい、みんなが本気になって話を聞いたり、発表をしないと学習を進められない等、自信をもってきました。

「漢字貼り」についても、その意義が子ども自身にわかったようです。自分の手で漢字プリントを作って貼った方が勉強になる、漢字を貼るのに手間はかかるが漢字の方が読みよい、手紙を書くとき「漢字貼り」でおぼえた漢字が使えて楽しい等々、積極的な取り組みがみられました。反面、「漢字貼り」を何のためにやるのか理解していないため、負担に感じている児童もいました。今後も、子どもたちの声に耳を傾けながら、積極的に漢字学習に取り組もうと思っています。

## 1 漢字朝礼

漢字を構成する一つ一つの部品を手がかりにして、漢字のもつ意味を考えてみようと思います。その作業を通じて漢字の楽しさ、おもしろさを児童が感じてくれることを願っています。さらに、児童の論理的思考を伸ばすためにも、毎週「解字朝礼」を行なうことにしました。朝礼で取りあげる漢字は、児童にとってできるだけ興味のあるもの、身近なもの、わかりやすく楽しいものを、と常に心がけ、くり返し学習することをモットーにしています。

国語の授業で、意味のわからない熟語や漢字に出会った時でも、部品を手がかりに考える習慣がつけばと思っています。

〔一学期〕**五月二十日 探**（提出漢字）

T 見たことがあるね。これは何を表わすの？



（板書）

C てへん！

T そう、左側は、てへんを表わしている。では右側がわかる人は？

C……

T 上の部分の「穴」がわかる人。

C 「あな」という字。

T 下の部分は？

C 木！

T 全体でこの字わかる人は？

C 「タンケン」の「タン」。

T そう、では訓読みがわかる人？

探（板書）

C さがす！

T もう一つの読みは？

C さぐる！

T 「手」と「穴」と「木」が集まってどうして「さがす」になるか、何か思いついた人。手を挙げて！

C ……

T 穴の中を手に木を持って何か探している。手で穴をさぐる。木で穴の深さをはかる。「𥫱」のつく字はこんなのがあります。

探偵団　探検　探険（板書）

C タンテイダン。タンケン。タンケン。

T 「探検」は、検査、調査のため探検する。「探険」は険しい冒険をするときに使うね。もうほかにないかね？

C 先生、辞典で調べます。

T そう、「探求」するとか、「探索」するとか。では、板書した漢字を一緒に読んでみよう。

**五月二十七日 深**（提出漢字）

T 先週の漢字を憶えている人は？

C さがす。さぐる。

T 音読みでは？

C タン！

T 今日は左側がさんずいの漢字です。

深（板書）

C ふかい。
T 他に知っている人？
C シン！
T この字がどうして「深い」になるのかな？

シ 深 手さぐり （板書）

C 海を掘っていくと深くなる。
T 「掘る」というのはどの字から考えたの？
C 木でどの位深いか調べる。
T 深さを調べてみるとき、木でさぐる、手さぐりするでしょう。底がどこまでか、さぐってみるということから「深い」になっている。「深」を使った熟語は？
C 深海。
C 深港。
T あまり聞かない熟語だが、後で調べてみよう。

その他、児童から、深夜、深海魚、水深、深度、深切、深底などの熟語が出されたので、いっせいに読ませました。

**六月三日 木 本 未 未**（提出漢字）

T 漢字だと何かな？


（板書）

C 木かな。
T もっとくわしく書こう。


（板書）

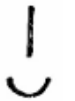
C 木だと思います。

T 漢字で書くと「木」です。こうなります。


（板書）

C 「米」だと思った。

T 分解すると何になるかな？


（板書）

C 幹と枝です。

T この下向きのは何？


（板書）

C 根だと思います。

T 横棒を木につけるとどうなる？


（板書）

C 「本」になる。

C 「モト」です。

T 木の細いところはどこ？

C 一番てっぺんの方です。

T てっぺんに横棒をつけるとどんな字になるかな？


（板書）

C 未来の「未」です。

T もっと長い横棒だと？

C 「末」です。

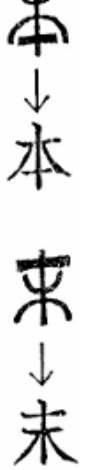
T 読み方だけでなく意味も考えてほしい。

**六月十七日 木 本 末**（提出漢字）

T 前回の勉強はどんな勉強だったかな？

C 「木」という字の幹の方へ印をつけたり、先の方へ印をつけたりしま した。

T 字の形とその字の意味との間につながりがあるのがわかりますか？




C 「本」（もと）は木の根元で太いから。

T 「末」（すえ）はどうしてですか？

C ……

T 熟語を作ってみるとわかるかもしれないね。

C 期末、末日、週末、月末、年末、末子、末吉、末尾、後始末。

T 関連づけて、意味が説明できる人は？

C 「最後」という意味。

C 「終わり」という意味です。

C 「木」という字の枝の一番最後の方に印をつけたから。

T はしっこの方ですね。

C 細い！

T 細くて小さいという意味の熟語を知っている人は？

C ……

T 「粉末」ですね。

――児童の感想――

「末」という字の意味を今まであまり考えてはいなかったが、「終わり」という意味がよくわかった。

**六月二十四日 本 末**（提出漢字）

T 「本」を使って熟語作りをしましょう。

C 日本、本気、二本、本来、本根。
T まだありますね。「ホンネ」というのは自分の本当の気持ちのことで、「本音」です。
C 本箱、本葉、本店、本当、本名、本場、本枝、本部。
T こんどは「未」とよく似た字。
C 未来の「未」です。
T 意味はどうですか？
C……
T 熟語を先に作ってみよう。
C 未来、未知、未完成。
T 「未完成」の意味は？
C まだ完成していない。
C 未満、未成年、未亡人。
T 「未」の意味は？
C まだわからない。
C 先のこと。
T 意味は「まだ……でない」ということです。

**七月八日 解**（提出漢字）

「角」「刀」「牛」でどういう意味になるのか、なかなかわかりにくかったようです。子どもから出た熟語も「正解」「解答」とわずかしか出ませんでした。身近な字だと考えていたのですが、生活の中ではあまり使われていないのかと意外でした。

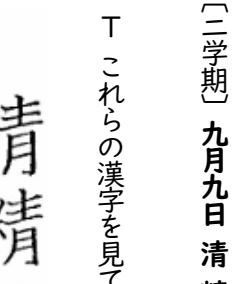
――一学期の反省――

児童自らが提示してきた漢字や、教師の発問から、解字を真剣に考えてくれるようにと願っていましたが、もう一歩というところでした。また一人の発言が全体に広がっていって、全員が納得できる「漢字朝礼」にしたいと考えていたのですが、一部の子どもの発表で終わったように思われます。このことからいつも同じ形式で朝礼を行なうのではなくて、いろいろな方法を考えていかなくてはなら

ないと考えさせられました。また児童が朝礼の中で進んで思考する状況を作ってやることも大切です。

〔二学期〕**九月九日 清 精 晴**（提出漢字）

T これらの漢字を見て気づくことはありませんか？




C どの字にも「青」という漢字がついている。どの漢字も「セイ」と読みます。

T 新たな発見はないですか？

C どの字も「青」という字がついていて、みんなその字をとって音読みは「セイ」です。

T では、その「青」はこの漢字のどっち側にありますか？

C 右側にあります。

C 「つくり」です。

T 「つくり」は何を表わしていますか？……これは音を表わしていますね。だから「表音」。左側は何を表わしていますか？

C 意味を表わしています。

T 何と言いますか？

C 表訓！

C 表語！

T 表音ですね。では、「清」の左側は何を表わしていますか？




C 水です。

T これは？




C 「こめ」です。

T では、これは？

日（板書）

C 「ひ」です。

T こういう字を形声文字といいます。形声文字は漢字全体の中でどれくらいあるだろう？

C 五十三パーセント！

T もっとずっと多くて九十パーセントもあります。

**十月二十四日 刀**（提出漢字）

T 今日はカタナを書こう。これが立ち上がった形になると。



（板書）

C 「立刀」です。

T 意味は刀だね。点がつくと何と読むかな？

C 刃（は）！

T 刀の先には刃がついていると考えるといいね。では、刀のつく字は。



（板書）

C 「切る」、昭和の「昭」、「招く」、「辺」。

T みんな「刀」があるが、こんどは「初」を考えてみよう。音読み、わかる人？

C ショ！

T 訓読みは？

C はつ。はじめ。

T 偏は何かな？

C 衣偏です。

T どういう意味かな？

C 着る物。

T 着物と刀とで、どうして「はじめ」という意味になるのかな?
C 着物を作るには、はじめ、刃物で切るからです。
T 「前」には「刂」があるね。「月」は何だと思う?




C 肉づき。
C 「月」と「舟」。
T 「⺌」は何を表わしているかな?
C 足の裏を形どった「止」が変化したものなので、止まる。
T 「止」「舟」「刀」の三つで、なぜ「前」になるの? 来週聞くから考えておくように。

**十一月二十五日 前 貧** (提出漢字)

T 前に勉強したことは?
C 「刀」です。
T 旁では? 思い出した人?
C……
T 今日はつづきの「前」だな。「前」を分解すると、「刀」の部分はどれかな? それから「月」はどんな意味になるの?
C 「舟」です。
T 「月」と「舟」と「肉」の三種類あるのだが?
C 「肉づき」です。
T 「刀」と「舟」と、上の部分。これはどんな意味かな?
C 「足」です。

T 足という場合と足から変化して「止まる」になる。止まっている舟をつないでいるものを刃物で切ると前へ進む。もう一つ「刀」のついた字を考えてみよう。



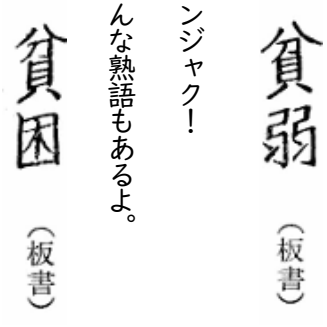
（板書）

T 何と読むのかな？
C まずしい。
T 音読みは？
C ビン！
T もう一つ。
C ヒン！
T 「分」と「貝」で「貧しい」になるわけわかるひと？
C ……
T 「貝」の意味は？
C お金です。
T そう、お金とか財産だね。全体の意味は？
C 自分のお金を分けてやったので貧しくなったのだと思います。
T それでは「貧」を使った熟語を調べておいて下さい。

**十二月二日 分 粉 紛**（提出漢字）

T 先週勉強した漢字は「前」と「分」ですね。今週は「分」をくわしくやります。これを使った漢字は？
C 貧しい！
T 音読みでは？
C ヒン。ビン。
T 自分のお金を分けてあげたので貧しくなった。では、熟語を考えてきた人。
C 貧乏！

T「乏」という字知っている？
C「乏しい」という読み方もあります。
T 全校朝礼の時、倒れる人がいるね。病気が原因だね。
C ヒンケツ（貧血）！
C ヒンミン（貧民）！
T「ミン」という字は？
C「臣民」の「民」。
T そうですね、では。




C ヒンジャク！
T こんな熟語もあるよ。



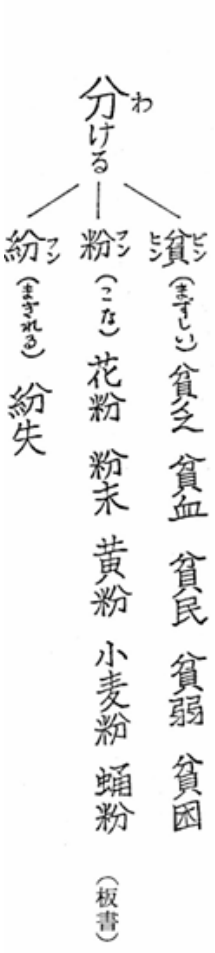

C ヒンコン！
T そうですね。今日は「分」の使われている漢字で「粉」をやります。まず音読みは？
C フン。
T 訓読みは？
C こな。こ。
T「米」と「分ける」と合わさって「粉」になるが、どう考えたらいい？
C……
T 米を刀で小さく分ける。他には？
C 米を刃物でつぶす。
T 刃物でつぶしてより分けて出てきたものが粉でしょう？
C 粉末、花粉。
T「糸」と「分」が一緒になってどんな意味になるか考えてみよう。
C 糸を刀で切って分ける。

C つけ加えて糸を刀で分けて使う。

T 分けて使うまでのところに意味がある。ヒントをあげます。分けねばならない状態というのは糸は使えるかな。もつれて使えない状態になっている。糸がもつれているのをより分けようとしている状態。そういう状態を意味する字で、「まぎれる」と読む。財布がどこに行ったかわからなくなった状態の熟語がある。どんな字があるかな?

C 紛失!

T それでは、「分」について整理してみよう。




**十二月九日**〈児童による漢字朝礼〉**易 皮**〈提出漢字〉「司」は司会の児童

司 この字の成り立ちはどんな字になったか知っているひと?


(板書)

C 「幼児」の「児」だと思います。

司 これでわかったひと?


(板書)

C 貿易の「易」です。

司 どちらが正しいと思いますか?

C 「易」です。

司 はい、そうです。音読みを知っている人はいますか?「エキ」というのは音読みですか?

C 音読みです。

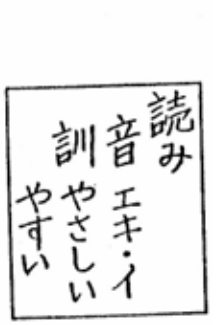
司 訓読みを知っているひとはいますか?

C 「やすい」です。

司 もう一つの訓読みを知っているひと？

C ……

司 正解は「やさしい」です。（カードを出す）（カード）




司 この字の熟語を知っているひとは？

C 易者、貿易。

T 他に「容易」があります。

司 次の漢字にうつります。（カードを順々に出していく）わかるひと？




正解は「皮」です。音読み、訓読みを知っているひと？

C 音読みは「ヒ」です。訓読みは「かわ」です。

司 熟語を知っているひと？

C 「皮膚」です。

司 意味を知りませんか？

C 手で皮をはぐことだと思います。

**十二月十六日**〈児童による漢字朝礼〉（つづき）

司 皮のつく熟語はありましたか？「皮膚」は出ましたが。（OHPで）

皮膚 毛皮 皮肉 皮相 皮膜 皮毛

司 「皮」のつく漢字を知りませんか？（OHPで）

彼 疲 被 鮑 皺 鞁 皷 皺 披 詖 跛 波 簸 破

司 「疲」は、ヒロウの「ヒ」です。訓読みでは「つかれる」です。（OHPで）

読み 音「ヒ」訓「つかれる」

司 熟語は？
C 疲労。
C 疲困。
司 「疲困」の読み方のわかるひと？
C ヒコン！
司 「疲」のつく熟語が他にありますか？（○○で）
疲労――→くたびれる つかれる
疲乏――→つかれきる 弱る
疲困――→つかれくるしむ つかれはてる
疲兵――→つかれた兵隊
――児童の感想――
私は司会をしたけれど、みんなが、わかっていても答えを言ってくれなかったりして、漢字朝礼も進めにくくて困ったから、もっとはっきりしてほしかったです。
聞く態度も悪くて、私達が質問などをした時、考えてくれている人も、ちゃんといたけど、聞かない人は、となりの人と話をしていたり、わるさをしていたり、よそ見をしていたりして、どちらかというと、聞いてくれない人が多くて、いくら一生けん命やっても聞いてくれなくて、やる気がしなくなったので、もうちょっと、態度をよくしてほしいです。それに聞いてもらえないのは、つまらないから、私達ももっと、みんなに聞心をもってもらえる漢字朝礼にしたいと思いました。先生の苦労が、わかったような気がします。

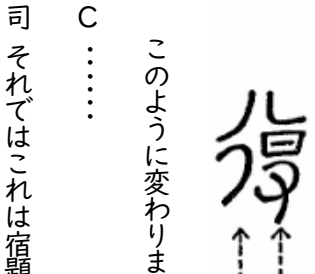
〔三学期〕**二月三日**〈児童による漢字朝礼〉 **復**（提出漢字）

司 これは何という字ですか？


（板書）

C 道路の「路」だと思います。
C 復習の「復」だと思います。

司 どうしてですか？
C 足があるからです。
司 答は「復」です。



（板書）

このように変わりました。どうして道路と足とで「復」になるのですか？

C ……
司 それではこれは宿題です。次にこの漢字の意味がわかるひとは？
C ……
司 読みがわかるひとは？
C 「フク」です。
司 熟語は？
C 復習、往復、復元、復活。
司 熟語から意味がわかりませんか？「復習」の意味は？
C もう一度くり返すこと。
T もう一度くり返すというのは何をくり返すことですか？
C 習ったこと！
司 「往復」はどういう意味ですか？
C 行ってまた帰る。
司 「復元」はどういう意味ですか？
C もとにもどす。
T 意味がわかってきたでしょう？
C 「くり返す」です。

**二月十日 採 盗**（提出漢字）

T 今日の漢字は「とる」。どういう漢字が思い浮んだ？

C 手に取る。

T これが浮かんだひと？

取る（板書）

C （大多数、挙手）前に「盗る」というのを本で見たことがある。

T 見たことあるひと？

C （少数、挙手）

T もう一つ、先生が調べたのがあります。

採る（板書）

C （数名「採取」とつぶやく）

T 「取」の音読みは？

C シュ！

T 「採」の音読みは？

C サイ！

T これも読みはいっしょだけど意味がちがうので使い分けなければいけません。どんな場合に使いますか？

盗る（板書）

C ぬすむ。こっそり取る時に使います。

T では、「取る」と「採る」の意味の違いを考えよう。

C 昔、中国では戦いに勝った者が相手の耳をとったので「取る」ができた、そんな話を聞いたことがあります。

T 「又」は手だね。中国では勝った印にしました。日本では首を切って証拠にした。それでは「採る」がわかるひと？「扌」これは手でしょう？

C 植物の実を手でとる。

T「采」は手と手で受けとる。手で木になっている実をとる。「採」は手でとる。「取」は切りとる。
　では、昆虫をとる場合、どっちの漢字がいいかな？
C 採る！
T 昆虫をとるときの熟語は？
C 採集！
T 新聞の記事を切りとるの「とる」は？
C 取るの方。
T きのことりの場合はどっち？
C「採」の方！
T 会社の入社試験で採用になる、選ばれてはいる。これは？
C 採用！
T これ、読めるひと？

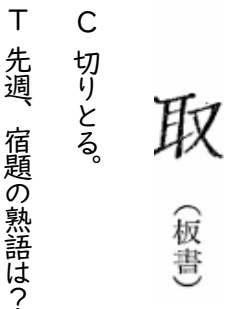

取材
（板書）

C シュザイ！
T「取」や「採」を使った熟語はこれ以外にもあるので辞典で調べておいて下さい。
C （板書を読む。）


採用ー選ぶ←手でとる①ー採る（サイ）
取材ー自分のものにする←取る①ー切りとる（シュ）
（板書）

**二月十七日**

T 先週扱った漢字は？
C「とる」です。
T どういう意味でしたか？
C 昆虫採集のときの「採」で、手にとる。
C 木についているのをとる。
T それから「選ぶ」という意味にもなるということだったね。じゃあ、これは？



（板書）

C 切りとる。
T 先週、宿題の熟語は？
C 取材、鳥取県、採点、採用、探知、採集。
T では読んでろよう。
C （一斉に読む）
T それでは、これから「漢字しりとり」をします。「用」を使って熟語を作って下さい。
C 用件。
T 「件」を使った熟語は？
C ……
T ないときは「用」を使って。
C 用事。
T では、こういうようにして、「砂」「点」「集」「県」「材」を使ったしりとり熟語を五つ作って下さい。

紙片を配り書かせる。四つ以上できた人に板書させ、それをみんなで一斉に読ませました。

**三月三日 撒く 蒔く 賀**（提出漢字）

T 今日は「なぞなぞ遊び」をします。まいてもまいても生えないものなあに？ どういう字でしょう。



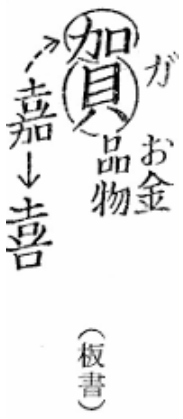
（板書）

C くさかんむりに「時」です。
C てへんに「散る」です。
C てへんがあるから手で水を散らす。
C 「蒔く」は「種をまく」です。

Tどうしてですか？

C種をまいて時間がたてば芽が出ます。

Tでは次に、卒業も真近なので、この字を勉強します。何と読みますか？



（板書）

C「ガ」です。

Tある字とある字が組み合わさっているね。

C「加える」と「貝」です。

T「加」は「嘉」ですが、「嘉」のどこをとっていますか？

C「加」です。

T二つ結びつけてどういう意味になりますか？

Cお金や品物をあげて、よろこんでもらう。

Tお金や品物をもらわなくても、気持ちで卒業生を祝ってやって下さいね。

――一年をふり返って――

五月から「解学朝礼」を始めて一年が過ぎました。毎週、どんな漢字を提示しようかと思いつつ、朝礼が終るたびに今日の反応はもう一つだった、今日は子どもの目が生き生きしてたと、一喜一憂の日々でした。やはり、漢字を教師自らが好きになること、漢字について研修すること、また指導の方法を工夫することを痛感しました。あまり欲を出さず、一つでも漢字を覚えてくれればと願いながら、くり返しくり返し提出することを心がけて、今後も漢字指導に精進するつもりです。

## 2 心のうた

学習委員会を中心にして行なった児童朝礼の際、高学年になると朗誦の声が小さくなることを多くの児童が反省しています。その原因として、消極的な態度と、学級での練習が不十分なことがあげられます。中には、自分は何のために「心のうた」をうたったり、暗唱したりするのか、その意義を認識していない子どもも少なくありません。学習委員はもとより、「心のうた」の意義をとらえてがんば

っている児童を中心に、積極的に取り組む学級づくりに努める必要があります。また、出東小を卒業した中学生や高校生の追跡調査を行ない「心のうた」の推進に役立てることも考えています。次に掲げるのは「心のうた」に一所懸命取り組んでいる子どもの感想文です。意欲的に学習に取り組む姿勢づくりに役立てばと思います。

私は心の歌がすきです。それは、この心の歌には詩や俳句を作った人それぞれの気持ちが、すなおに表現されているものや、まわりの様子がうたう人の頭にうかんでくるようにかかれているものなどいろいろあります。この心の歌を覚えたり、となえたりすることによって、いつかどこかで、自分のために参考になったりすると思うからです。

私は、心の歌の中で、とくに、草野心平さんの「春の歌」がすきです。これは、このあいだ、音楽クラブの人が、作曲されたものです。これをうたったり、となえたりすると、もうすぐ春なんだと、強く心にひびいてくるからすきです。もっと他にも沢山の詩や俳句に、関心をもちたいと思います。

（K・S）

## 3 漢字貼り

「漢字貼り」をさせると、どの子もみんな懸命に取り組むのですが、貼るのに要する時間がまちまちで、最後に貼り終わる子どもを待つと一時間を費してしまうことがあります。貼る時間の個人差や、貼りながら文章の内容をどの程度読みとれているのかを明らかにするために実際に調査しました。

学習箇所「サリバン先生との出会い」　貼付する漢字数四十八字。

所要時間　一五分以内　一六～二〇分　二一～二五分　二六～三〇分　三一～三五分

男子　六％　二九％　四一％　一二％　一二％

女子　二〇％　五四％　一三％　一三％　〇％

漢字貼りをしながら本文の内容がつかめたのは、男子十七パーセント、女子四十パーセントでした。

――漢字貼りについての児童の声――

・貼るのは面倒だが貼ってしまうと漢字の方が読みよい。

・漢字貼りをしている学校は、日本でも自分たちの学校だけだということに誇りを感じている。

・他の学校の人に本を見せて、いばったことがある。

・手紙を書く時、漢字貼りでおぼえた字を使えて楽しい。読書の時、すらすら読めて助かる。
・自分で漢字を調べて貼るようにしたい。
・ふりがなは最初の漢字だけでよい。
・行を頁が変わるごとに変えてほしい。
・漢字貼りは家でやってもいいのではないか。
・止めた方がいい。
・貼るところと貼らないところがあるのはなぜか。
・読む力がないので難しい字は止めてほしい。
・漢字貼りはやりたい人だけやればいい。

女子の多くは漢字貼りが自分たちにとって役に立つと考えているのに対し、男子の中には面倒だから止めてほしいと考えるものがいるようです。適格ご指導をして、解決をはかりたいと考えています。

（担当 多久和昭治・安田秀晋）

## 第7章 六年生の実践

### ――漢字（解字）朝礼を中心に――

出東小学校の六年生を担任して、他の小学校の児童と比べて驚いたのは次の点でした。

・国語に限らず、音読の声が大きく、はっきりしていること。発表能力を身に付けていること。
・小学生特有の〝拾い読み〟がないこと。
・漢字に対して拒否反応がないこと。過去に何度も経験した「そんな字ならっていない！」「なんと読むの？」等の子どもたちの声を耳にしないこと。
・辞書を使うことに抵抗を示さず、気軽に利用すること。
・したがって、読書にも積極的に取り組むとともに、学習全般を通じて子どもたちの反応がしっかりしていること。
・どの教科の教科書も、よく読めること。

これらの点は、ここに赴任するまで、「出東小学校＝漢字貼り」、という程度の認識しか持ちあわせ

ない転入教師にとっては、驚きとともに大変な感銘を受けたところでした。出東小においては、特定の児童ではなく、ほとんどの児童が漢字を上手に、思い通りに使って文を綴っているのです。その後、子どもたちと接触が増すごとに、多方面にわたっての「漢字貼り」の効用と、その定着を見ることができました。

また一般に音読を指導するにも一苦労な高学年が、漢字を何の抵抗感もなく、辞書を使用しないで書くこと、いや書けるということは、「お話朝礼」「解字朝礼」「漢字貼り」という長い漢字教育の積み重ねがあったからでしょう。それも無理強いをしないで、自然に習得させるという方法によって、このような子どもたちを育てあげたといっても過言ではありません。最近、子どもたちが、とかく自分の考えを正しく伝えることができないといわれる時に、それを無理なく自然に身に付け、また〝生活〟の中に漢字を生かしている出東小の子どもたちは、たいへん幸せなことと思います。

山東小の六年生の「漢字朝礼」は〝解字〟が中心です。漢字は論理的に構成されていて、分析、総合の手順をふんで「偏」や「旁」の意味をおさえると、高学年の児童に納得づくで、ずっとわかりやすく教えることができます。ですから、本来論理的な思考力が発達する高学年の児童にとっては、興味や関心をもって取り組めるはずです。

しかしながら「漢字朝礼」も六年生になりますと、児童の方が「またか!」という気持ちになりがちで、あまり解字のわかりきった漢字は意欲を示さないし、逆にむずかしい漢字では考えようとしないのが、今の六年生の実体です。

また一方教える側はどうしてもワンパターンになりがちですから、そのため「解字朝礼」で指示する漢字は慎重を期して選ばねばなりません。

そして時にはゲーム的な要素を取り入れてやると、大変よろこび雰囲気がちがってきます。さらに子ども同士で〝解字〟をやらせてみることも、高学年では有効な方法の一つです。

こうして「漢字朝礼」で学んだことが、読書をする時、わからない漢字にぶつかったときに、生きた力となって発揮されるようです。ともかく、あせらずくり返し、くり返しやることでしょう。

六年生は一年次から「漢字貼り」や「お話朝礼」、そして「解字朝礼」を積み重ねてきた子どもたちです。特に五年生の時には、漢字の学習が総合的にできるように「漢字学習カード」を作って学習を

しました。そこで、一学期は六年の新出漢字を中心にして漢字の成り立ちを勉強し、さらに熟語作りへと発展させることを試みました。以下、簡単に要点を記しましょう。

〔一学期〕**五月二十一日 兼**（提出漢字）

「兼」。音では「ケン」、訓では「かねる」。




もとの字を示しながら「禾」と「手」について考えさせたら、二本のイネを一諸にしてもつ、という結論にたどりつきました。そこで、兼は「ふたつ以上を一緒に合わせる」→「かねる」という意味を押えてから、熟語や短文として「兼業」「兼用」「兼備」「兼務」「大は小を兼ねる」などが出てきました。終りに「昼夜兼行」について、どう読むのか、どんな意味なのか聞いてみましたが、読みだけで時間切れになりましたので、意味は次週の課題としました。

**五月二十八日 閉**（提出漢字）

「昼夜兼行」についての意味を考えた後に、「閉」について「ヘイ」「とじる」「とざす」「しめる」「しまる」の読みを教えました。子どもから出た熟語は「閉会」「閉館」「開閉」「密閉」「閉店」「閉式」などで、指導を加えながら出た熟語は、「閉口」「閉幕」「閉門」「閉廷」「閉校」「閉鎖」などです。

**六月十一日 脳**（提出漢字）

「月」については、みんなよく知っているので、「凶」についてまず考えてみることにしました。




①は毛に見えるという一人の発表から、これは頭の中のしわで、脳をさすことがわかりました。②は頭の中の脳を包む骨の形を表わしたもので、肉月と合わさって「脳」となりました。またこの時間には「月」についての関心が強かったので、「月」に関する字を黒板に書かせました。児童が書いた字は「腹」「胸」「肺」「背」「肌」「脇」などです。

**六月一八日 鋼**（提出没字）

「コウ」と多数が読めたのですが、「はがね」と読めたのは少数でした。「岡」については山につながりがあるとヒントを与えてもなかなか考え出せないので、かたく平らな、高い台地を表わす「岡」から、かたくてじょうぶな意味があることを指導した後、「綱」「剛」についても検討しました。その後、子どもから出てきた熟語には「鉄鋼」「鋼鉄」「鋼管」などがあり、さらに「精鋼」「鋼材」について話をしました。

**六月二十五日 洗**（提出漢字）



「先」について、人が自分の足先を水で流してすすぐ、あらうと解字しました。熟語は「洗顔」「洗面」「洗剤」「洗濯」「水洗」などが出ました。

**七月二日 補**（提出漢字）



「甫」は、やぶれたさくをつくろうことを表わし、「補」は衣をつくろうことを意味し、このことから、つくろう、おぎなう意味になることを指導しました。出てきた熟語は「補強」「補助」「補習」「補導」「補給」「補欠」「補修」などです。

以上が、一学期中に行なった六回の解字朝礼についての記録です。朝礼のやり方は、六年生の新出漢字について解字をしながら、漢字の読み、意味、さらに熟語作りを行ないました。子どもたちが漢字の偏や旁について高い関心と知識を持っているので、解字の指導にたいへん役立ちました。

子どもたちが自主的に学習する姿勢を身に付けることをねがって、第三週日からは子ども自身が熟語を黒板に書かせるようにしたところ、漢字朝礼に対する関心がさらに高まり、積極的な学習態度が生まれたようです。

今後は同音異義の漢字を使い短文を作らせていくことで、漢字が読め、しかも文章の中で正しく使えるようにさせたいと考えています。

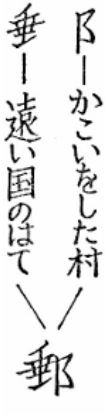
〔二学期〕**九月十七日 垂**（提出漢字）

「垂」は「スイ」とかなりの子どもがすぐに読めましたが、「たれる」「たらす」の読みは出ませんでした。



イネの穂が垂れた形と土とを合わせた字で、実ったイネの穂が実の重さで垂れ下がっている様子から、意味は「垂れる」「下に垂れ下がる」とし、垂を使った熟語を探させたところ、「垂直」「垂線」「胃下垂」「雨垂れ」「懸垂」「虫垂」「垂れ幕」などが出ました。

**九月二十四日 郵**（提出漢字）




「垂れ下がる」と「ガケ」を合わせた字だとつぶやいた児童がいました。そこで昔、手紙は飛脚が走って行って届けていたこと、遠い国のはてに手紙を持って行き来する人のために柵で囲って作った休憩所を「郵」といったことを説明しました。「郵便」とは手紙や荷物を運ぶのを意味することも付け加えておきました。

**十月八日 革**（提出漢字）

「革」の読み方として、「かく」はすぐに出て来ましたが、「かわ」の方はなかなか出て来ませんでした。



獣の全身の皮をピンと張った様子をえがいた字から解字をし、意味は動物の皮をなめしたもの、そ

れから転じて、あたらしくする、あらためると説明しました。次に「革」を使った熟語探しと意味の検討をしました。「かわ」の意味からは「皮革」「革ぐつ」「牛革製品」など、「あたらしい」の意味のものとして「革新」「変革」「沿革」「革命」「改革」などをあげておきました。

**十月十五日 閉**（提出漢字）

「閉」の読み方として「ヘイ」「しめる」「とじる」はすぐ出ましたが、「しまる」「とざす」は出てきませんでした。「才」は水の流れをたち切って止める堰をえがいた字で、「たち切る」の意味があり、「閉」で門のとびらをピタリと閉じて出入りを止めることを表わすと解字しました。意味は①「しめる」「しまる」「とじる」「とざす」と、②「おわりにする」「やめる」とに分け、熟語探しと意味の検討をしました。①の意味で使う熟語は「閉口」「閉鎖」「閉門」「開閉」「幽閉」「密閉」などがあり、②の意味で使うものとしては「閉会」「閉館」「閉校」「閉店」「閉幕」などがあげられました。

**十月二十七日 裁**（提出漢字）

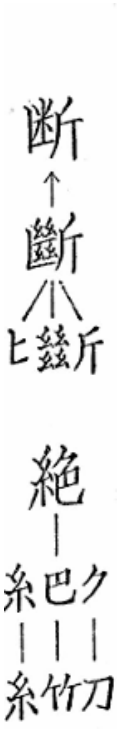
「裁」の読み方で「サイ」「さばく」はすぐに出て来ましたが、「たつ」とはなかなか読めなかったようです。解字は、まず「衣」がきものを表わすこと、「才」が刃物であることはすぐにみつけられたので、「土」は「才」と同じで「切」の意味であることを補足して、「戈」では刃物でたち切ることを表わしていることを教えました。意味は、①布をたつ、たち切る↓はっきりと区別をつける、②よいことと悪いこととの区別をきめてしまつする、「さばく」であると説明し、熟語探しと意味の検討をしました。①の意味で使う熟語として「和裁」「洋裁」「裁断」などかあり、②の意味のものとして「裁判」「裁決」「裁定」「独裁」「裁量」などがありました。「サイバイ」という言葉を出した児童がいたので、皆にどんな字か宿題にしました。

**十一月五日 裁 断 絶**（提出漢字）

初めに先週の課題であった「栽培」の「栽」と、すでに学習した「裁」とのちがいについて確かめてから本題に入りました。

まず、「裁」「断」「絶」、いずれも「たつ」という訓があることを思い出させた上で、次のように板

書しました。




「断」は糸の束をバッサリと切ることから、続いているものを思い切りよく切ること、プッツリとやめることの意味があること、「絶」は刀で糸や竹をプッツリと切ることから、関係をたち切る、やめて二度としない意味があることを説明しました。おわりに「裁つ」「断つ」「絶つ」の使い方を考えさせました。命を「絶」つ、医師にとめられて酒を「断」つ、型紙に合わせて布を「裁」つ、消息を「絶」つ、などがあげられました。

**十一月十二日 在**（提出漢字）

「在」の読み方として「ザイ」は簡単に読めたのですが、「ある」とはなかなか読めなかったようです。「土↓才」から水の流れをたち切って止めるせき、「在」は土でふさいで水の流れをせき止めることを表わします。意味は①（水をせき止めると、じっと水が止っていることから）ある、と②いなか、とかあり、熟語探しと意味の検討で、①の意味では「現在」「存在」「滞在」「実在」「在庫」など、②の意味では「在郷」「在所」「近在」などを提示しました。

**十一月十九日**

今週は二字連続の漢字語の語構成を指導しました。

A 週番 上陸 場所 前後

このAグループの熟語について、まず次のように指導してみました。

・週番――一週間の当番の意（上から順に読んでいけば意味がわかる。字間に↓をつけて考える）
・上陸――陸に上がる意（下から上へ読んでいけば意味がわかる。字間に↑をつけて考える）
・場所――ところ、位置（同じ意味の語で作られている。字間に＝をつけて考える）
・前後――前と後（反対の意味の語で作られた熟語。字間に・をつけて考える）

この後、次のBグループの熟語をこの四つに分類させました。

B 校舎 善悪 品物 寒暖 教室 録音 道路 注意 美点 写生 先頭 是非

「是非」だけはどうしてもわからないようで、辞書を引いてから・印を付けていました。

〔三学期〕**一月二十一日・二十八日 計 図**（提出漢字）

「はかる」と読む漢字を全部思い出してもらいました。

「量る」は、物のかさをはかるますの形を表わした日と、重さを意味する重とが合わさり、物の重さをはかること。

「測る」は、水を表わす「氵」とものさしの意味の「則」が合わさってでき、ものさしで水の深さをはかることを表わした字で、深さ、広さ、大きさなどをはかるときに使う。

「計る」は、「言」と数の意味の「十」で数を言う、数えることを表わした字。

「図る」は、「口」が土地を区画することを、「义」は細かく区画することを表わし、区画する前にする計画の意味。

以上の解字をした後、次のそれぞれの短文にふさわしい「はかる」を入れさせました。池の深さを（　）る。体重を（　）る。五十メートル走のタイムを（　）る。人の安全を（　）る。人の気持ちを推し（　）る。

**二月四日 覚 冷**（提出漢字）

「覚める」は「見」と「冖」（まじわる）で、見たり、聞いたり、感じたりしたことが一つにまじわって、はっと気がつく意味で、さらに「さめる」「気づく」「おぼえる」の意味もあります。「冷める」は「冫」と「令」（すんできれいな）で、氷のようにすみきってつめたいことを表わすことを説明し、次の短文の中に漢字を入れさせました。入の声で目が（　）る。湯が（　）る。

**二月十八日 始 初**（提出漢字）

「始め」は、「台」から自分で動きはじめること。「初め」は、着物を作るときにはじめに布にはさみを入れて切ること。この意味の違いを思い出させて、次に以下の短文に「始」と「初」のどちらかを選んで入れさせました。剣道大会で（　）めて優勝する。七時からニュースが（　）まる。新学期が（　）まる。もう一度（　）めから行なう。冬休みに（　）めてスキーをした。年の（　）めに大

社にお祭りに行った。読書を（　）める。授業が（　）まる。

**二月二十五日・三月四日 納**（提出漢字）

「納」は、小屋（納屋）の中に入れることから、織物を倉におさめる意味で、読みとして「おさめる」「おさまる」「ノウ」「ナン」「ナ」「トウ」をおしえました。



「納」を使ってある熟語として、「納屋」「納税」「出納」「納得」「納戸」などをあげました。その他、「おさめる」と読むグループについて「収める」「治める」「修める」をあげておき、とくに「修」については、人がらを正しくする、心やおこないを正しくするという意味があることを思い出させました。次の短文を出しました。学業を（　）める。本だなに本を（　）める。……



ハサミとノリを使って，まるで工作の時間のような「漢字貼り」授業

――漢字貼りについての六年生の感想――

子どもたちは、一年生から「漢字貼り」をしているので、次のようなさまざまな感想をもっています。

・漢字貼りをしたためか、学年の教科書でならわない字でも読めるようになった。
・漢字が貼ってあると読みやすい。
・ひら仮名でわからない意味でも、漢字を貼ると意味がわかる時が多い。
・漢字は苦手だったけれど、漢字貼りをするようになったら簡単になった。
・初めの頃は読むのも、貼るのも大変だったが、何回も出て来た漢字は、ふり仮名がなくてもわかるようになった。

・最初はいやたったが、六年生までやっていたら、だいたいの漢学は読めるようになった。
・新聞などを読んでもわからない字が少ないので読みやすい。
・親戚の人が読めない漢字も読めて自慢ができた。

以上のような賛成意見が大多数でした。この感想は、終礼時を利用し、無記名で書かせたので、子どもたちの本音といえると思います。

しかし困った問題として、「一つ一つ切って貼るのでめんどうだ」「字を貼る紙の大きさが違う場合はやりにくい」などの感想もあったが、一方「自分で漢字をみつけて貼るのがいい」といった建設的な意見もありました。

この一年問、どんな字をどのように教えようかと、ずい分迷いながらやってきました。また子どもたちにとって漢字朝礼が負担にならないか、興味があるだろうかと指導するごとに子どもの発言や顔を見ながら実践を重ねてきました。去年の三月四日の漢字朝礼後、子どもたちが六年間続けた「お話朝礼」「解字朝礼」や「漢字貼り」について感想を求めてみたので、次にそれを紹介して今年のまとめとしたいと思います。

〈六年間の漢字教育の感想〉石原恵美子

一年二年の時は「おはなし朝礼」、三年以上は「解字朝礼」とか「漢字貼り」で、むずかしい漢字が覚えられるようになり、読めない字も、漢字の形でだいたいのことがわかるようになりました。小学校で勉強した漢字をもとに中学での国語もがんばりたいと思っています。

（担当 錦織豊・吾郷幸美）

# 出東小学校の漢字教育について思う

石井 勲

昭和五十二年の暮の事だったと思う。「五十一年より石井方式漢字教育を全校挙げて実践すべく研究しているが、解らない事があるので教員を派遣するから教えてほしい」という趣旨の手紙を稲田校長から受取った。

「それならこちらから行く方がよい」という事で出東小学校を訪問するようになって六年、訪問はこの八月で七回になった。しかし毎年訪問するたびに、先生が何人か新しい先生に変っていて、最初私が訪問した時に在職していた先生方は、今は一人も残っていない。

それなのに、出東小学校の漢字教育に対する姿勢は少しも変りがない。それというのも常に新しい先生を、その体制の中に温かく包み込んで、完全に同化してしまうからであろう。と同時に、それは石井方式漢字教育の効果が著しいことを、先生方が認めているからだと確信する。

石井方式漢字教育は、労少なくして最も功多き方法であることを自負するものであるが、勿論、出東小学校の先生方の気取らず気張らない姿勢が、調和を保って息の長い研究を続けさせている主な理由だと思う。

本書一〇三頁に、基本的姿勢として、「いつも『子どもに直接はねかえる研究』をめざし、たえず全職員の共通理解をはかり、各人の創意工夫による実践を大切にして行きたい」とあり、また、「いつでも、どこでも、誰にでも出来る、長続きのする研究を目ざして行きたい」と述べている。これは実に立派な態度で、だからこそ、この八年間、指導する先生が次々に変っても、この教育がますます力強く発展して行っているのだと思う。

石井方式漢字教育は、中間校長が〝はじめに〟（九七頁）で、「感心はしながらも……実践する気にはなれませんでした」と述べられているように、先生方に強い感銘を与えるものがありながら、さて実践にまではなかなか引っ張り込むだけの力に欠ける憾みがある。それは〝教科書の漢字貼り〟が障害になっているようである。

確かにこれは先生方にとって負担になる仕事である。しかし、同じく負担を感じているに違いない

と思われる子どもには、一三四頁に述べられているように、「漢字貼りの時間を楽しんでいる」のである。

そして、これが子どもたちの漢字力を伸ばすだけでなく、読書の楽しみを子どもたちに解らせてくれるのである。かな書きでは読みにくく、読んでも意味が解りにくいことは、誰だって経験済みのはずである。それは、一年生の子どもにとっても決して例外ではない。

かな書きの、読みにくく解りにくい本を読まされた子どもは、本好きになれる訳がない。それで本を読まないから、ますます本を読む能力が育たない、という悪循環に陥るのである。これを救う道は、漢字を多く提出して本を読みやすくし、解りやすくすることである。

ところが今まで、それは指導要領違反であるとされ、学年別配当漢字表にない漢字を教えることを恐れる先生が多かった。しかし、昨年の全国国語教育研究者集会で講演された文部省の小林一仁教科調査官は、「学年配当漢字表は必ずしも適正ではないので、ふりがなをつけてでも早めに漢字を提出し、なれさせた方がよい」という趣旨の話をされたという。

石井方式漢字教育は決して指導要領違反ではないのである。指導要領の作成や漢字の学年配当に当たられた輿水実先生も、「漢字表の漢字は学習の最低基準を示したものであるから、それを教えないのは指導要領違反であるが、それ以上教えようという石井方式は決して違反ではない」とおっしゃっている。ぜひ安心して実践してほしい。実践してみれば、必ず「やって良かった」と思われるはずである。

（昭和五十八年十月三日）